HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ベルギー金融資本の成立と発展(2) : ソシェエ・ジェネラルとブリュッセル銀行
Author(s)	石坂, 昭雄
Citation	北海道大學　經濟學研究, 20(1), 43-122
Issue Date	1970-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31202
Type	bulletin (article)
File Information	20(1)_P43-122.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ベルギー金融資本の成立と発展 (II)

ーソシエテ・ジェネラルとブリュッセル銀行ー

石　坂　昭　雄

序
Ⅰ　ソシエテ・ジェネラルの設立とその初期の活動．1822—30.
Ⅱ　ベルギーの産業革命と銀行資本．1830—39.
Ⅲ　2月革命の経済危機と銀行改革ー中央銀行の創立（以下19巻3号）
Ⅳ　ベルギーの対外進出と銀行資本．1850—1914.（以下本号）
　(1)　ヨーロッパの鉄道建設とベルギー銀行資本．1850—73.
　(2)　独占形成期．1873—1914.
Ⅴ　両大戦間における金融資本
結　び

Ⅵ　ベルギーの対外進出と銀行資本　(1)　ヨーロッパの鉄道建設とベルギー銀行資本　1850—73

48年恐慌以降，ベルギーの製鉄業は，過剰な生産能力を抱えていたが，これまで銑鉄の最大の輸出先であったドイツ関税同盟は，52年その特恵関税を100キロ当り1マルクから1.50マルクに引上げ，53年にこれを廃止して，急速にそのコークス銑の生産を増大させており，フランスでも55年漸くコークス銑が過半を占め，以後急速に木炭銑を駆逐して行った。こうして，ベルギーは，これまでの銑鉄輸出を，レール，棒鉄等の二次加工製品の輸出に切換えざるをえなくなったが，丁度53年に始まり66年まで続いた鉄道ブームは，他の国と同じくベルギー製鉄業に広大な市場を保証した。わけても，この時期

の鉄道建設は，鉄道の殆んど普及していなかった，オーストリア・ハンガリー帝国，イタリア諸邦，スペイン，ロシア，トルコを中心とし，その大部分

第18表　ヨーロッパ後進諸国における鉄道キロ数

	オーストリア	イタリア	スペイン	ロシア	トルコ
1850	1,519	618	77	601	—
1856	3,175	1,480	533	1,044	—
1860	4,543	2,162	1,649	1,589	66
1866	6,301	5,066	5,081	3,926	290
1868	7,311	5,671	5,243	7,009	290
1870	9,589	6,175	5,295	11,243	998
1871	11,899	6,378	5,328	13,950	1,052

G. Stürmer, *Geschichte der Eisenbahnen* I. Bromberg ,1872. SS. 88-9, 172, 183.

第19表　鉄生産＝輸出　　（1万トン）

項目 / 年次	銑鉄生産	銑鉄・鋳鉄輸出				鉄第一次加工品輸出	レール・棒鉄輸出		
		計	プロイセン	フランス	オランダ		計	フランス	スペイン
1851	14.4	6.3	4.4	1.8		0.2	0.4		
1852	16.8	6.5	1.9	2.6		0.2	0.7		
1853	17.9	10.1	4.8	4.9	0.2	0.4	1.5		
1854	23.0	10.2	3.5	4.7	1.9	0.4	2.0	0.2	
1855	28.5	5.5	1.1	3.3	1.0	0.4	1.4	0.5	
1856	29.4	6.3	1.2	3.5		0.6	1.7	1.0	
1857	32.2	5.4	3.1	4.9		0.6	3.2	1.4	
1858	30.2	7.4	5.3	4.6		0.9	2.9	1.4	0.1
1859	32.4	3.7	2.0	4.3	0.2	0.6	4.8	1.0	1.7
1860	31.9	2.2	0.8	4.1	0.2	0.3	6.2	1.1	2.7

Exposé du Royaum 1850-1860, tit. Ⅳ. pp. 123-6

が，クレディ・モビリエあるいはロートシルト系の，フランス系投資銀行の手で設立された鉄道会社によるものであった。[1] この全ヨーロッパ的な鉄道ブームの波をベルギーの銀行資本が看過する筈はなく，オーストリア，スペイン，イタリア等の投資銀行，あるいは鉄道の株式・社債が一丁度53年と56年の5分から4分5厘への公債借換と相俟って，一ブリュッセル証券市場で

人気を博するに至った。そして，ベルギー製鉄生産能力の¼を支配しているソシエテ・ジェネラルも，外国企業の株式・社債の引受けによって，その系列下にある製鉄企業の市場を開拓し，一方製鉄企業も，社債によって支払を受ける場合，これを証券市場に放出するために銀行の仲介を必要とした。特にベルギー銀行は，ブリュッセルの個人[2]銀行ブリュッグマン Brugman，ドゥ・ヒルシュ De Hirsch，ビショッフスハイム Bischoffsheim，マテュー Mathieu と共に，「全国鉄道資材会社」Compagnie Générale du Materiel des Chemins de Fer を56年に設立し，鉄道資材の輸出と引換えに鉄道株・社債をブリュッセル証券市場に放出した。又翌57年に設立された「中央鉄道建設会社」Cie.Centrale pour la Construction et l′ Entretien du Materiel de Chemin de Fer も個人銀行と連繋しつつ，同じような発行業務を展開した。[3][4] 57～8年には，クレディ・モビリエ系のスペイン動産信用銀行 Credito Mobiliario Español やこれに対抗するロートシルト系のオーストリア商工銀行（クレディット・アンシュタルト）Credit-Anstalt für Handel und Gewerbe，スペイン商工会社 Sociedad Española mercantil e industrial の如き企業会社，あるいは，ロンバルディア＝中部イタリア鉄道 Strada fferrate lomfarde e del′ Italia Centrale，バイエルン鉄道（ロートシルト系）の株式・社債が場外取引の対象となったに過ぎなかったが58―9年からは，これに加えて「スペイン北部鉄道」[5] CF. du Nord de l′ Espagne（クレディ・モビリエ系），コルドヴァ＝マラガ，コルドヴァ＝セヴィリヤ，シウダード・レアール＝バダホス Ciudad Real-Badajoz，グラノレルス Granollers の各鉄道，イタリアのトスカナ中央 Toscana Centrale，リヴォルノ Strade fferrate livornesi，アレッサンドリア＝ブラ Alessandria-Bra．トルコのルスチュック＝ヴアルナ Roustchouk-Varna．オランダ中央 Nederlandsche Centrale Spoorweg，ロシア（ポーランド）のヴァルシャワ＝ヴィーン，ルクセンブルクのギョーム＝ルクセンブルク Guillaume-Luxembourg の各鉄道債が個人銀行や企業会社の手でブリュッセルで発行された。これらの社債の大部分は，額面250フラン（発行価格230

～40フラン）6分利付と云う好条件のものであったが，基礎の脆弱なこれらの鉄道会社の多くが66年の恐慌で支払停止に陥り，ベルギーの投資家に5～7,500万フランの損害を与えた。[6)]

しかし，67年から70年の間には，更に「オーストリア不動産信用銀行」[7)] Bodenkredit-Anstalt，ロシア不動産銀行，国立ホンデュラス不動産信用銀行 Crédit Foncier d'Etat du Honduras，ヴィットリオ・エマヌエル鉄道 Vittorio Emanuel，特許会社オーストリア鉄道 K.R. priv. Staatseisenbahn-Gesellschaft，合同南オーストリア＝ロンバルディア＝中央イタリア鉄道会社 Vereinigte Südösterreichische, Lombardische und Zentral-Italienische Eisenbahn-Gesellschaft（クレディット・アンシュタルト＝ロートシルト系），ハンガリー東部鉄道 Ungarische Ostbahn の社債が，パリ市債やフランス公債と並んでブリュッセル証券市場に姿を現わした。

一方，こうしたヨーロッパ全土を捲込む鉄道ブームは，ベルギーにも波及し，1850年から73までの間に1,800キロが建設され，ベルギーはヨーロッパ随一の密度の鉄道網を所有するに至った。この間，国は殆んど新線建設を行わず，これを私鉄に委ね，特定路線には配当保証を認めた。そこで，52年以降69年まで50の鉄道会社が設立され（第20表）75年には，営業路線3,500キロのうち，国は665キロを占めるに過ぎなかった。そして，ソシエテ・ジェ

第20表　鉄道会社の設立　　（百万フラン）

	設立数	資本金		設立数	資本金
1852	3	35.0	1864	6	38.5
1853	4	30.5	1865	5	70.7
1854	2	11.3	1866	4	41.0
1856	3	32.1	1867	3	44.4
1859	1	2.5	1868	1	20.0
1860	1	5.0	1869	7	53.9
1861	2	6.6	1870	—	—
1862	4	20.1	1871	—	—
1863	4	18.0			

Louis Frère, *op. cit.* I. より作成

第21表　株　式　会　社

	1857 会社数	1857 資本金	1873 会社数	1873 資本金
銀行＝金融	14	1.50億フラン	35	5.35億フラン
保　険	31	0.17	25	0.17
鉄　道	21	3.00	47	7.20
石　炭	32	1.00	56	3.60
金　属	34	1.60	51	2.75
運　河	29	0.23	39	0.33
其の他	39	0.55	61	1.20
計	200	8.05	314	20.60

Chlepner, *op. cit.* p. 55

ネラルも，その系列下にある製鉄会社の市場開拓，石炭の輸送路確保のため，積極的に発起業務に携っている。然しこれら新線の多くは，平行路線を持つ赤字線で，政府の選挙対策としての配当保証によって辛じて維持されえたに過ぎない。そして，鉄道会社はその資材購入に際し，株式・社債をもって支払に充てたため，供給者側は大幅な割増を要求し，かくて，その市場価格を一層低落させることになった。こうして66年恐慌で1億2,000万フランもの損失を蒙った私鉄企業は，集約化されて行く一方，次第に国に移管され，1870年には，ベルギーの鉄道は，国鉄，「大中央」Cie. du Grand Central,「鉄道経営」Cie. d' Exploitation の系列に三分され，75年には，3,500キロの総延長中，国鉄が2,000キロを占めた。[8)]

次に，この期における二大銀行の活動と，経営を分析してみよう。

A　ソシエテ・ジェネラル　この銀行は，全ヨーロッパ的な鉄道ブームの中で比較的慎重に行動し，クレディ・モビリエ流の投機銀行に陥ることを避けた。そして発行業務も，その傘下の企業に市場を確保する場合に限られた。例えば，58年，同社は，フランスのクレディ・モビリエ，スペイン動産信用銀行，ベルギー銀行と共に，「スペイン北部鉄道」の設立に参加して1,000万フランを出資し，ベルギーの製鉄＝機械企業（マルシネル＝クイエ，シャトリノー，モンソー，サン・レオナール，コックリル，プロヴィダンス，スクレッ

サン各社）に1,800～2,000万フランに及ぶ，レール，機関車，車輛等の資材の注文を確保し，うちレールは7万トン（59年に3万トン，残りは次の4年間）に達した。中でも，コックリル社は350万フランを受注し，スクレッサンも7,000トンのレールを含む150万フランの発注を受けた。[9] 又，1867年，ソシエテ・ジェネラルはロシア帝国の鉄道公債発行を引受け，スクレッサン，コックリル，シャトリノー，モンソー各社に合計14,000トンのレール（約287.5万フラン）を受注している。[10] 一方，ソシエテ・ジェネラルは国内の鉄道にも，積極的に参与しており，1851年のシャルルロワ＝ルーヴァン Louvain 鉄道，53年ベルギー東部鉄道 l' Est-belge（59年，Givet まで延長，シャルルロワ炭田と，フランスのメッツ，ランスを結ぶ），モンス＝オーモン Mons-Haumont 鉄道，等の石炭輸送路線の他，ダンドル＝ワース Dendre-Waes（51年），スパー＝ペパンステ Spa—Pepinster（58年），ベルギー鉄道 Société Belge des Chemins de Fer（65年，デンデルレーウ Denderleeuw＝クールトレー，ルーセラーレ Roeselare＝イープル，ポーペリンゲ＝アズブルック Hazebrouck，ニューポールト Nieuwport＝ディックスマイデ Dixmuide）の設立に当ってこれを参与した。然しこれらの鉄道は，次第に統合され，70年以後順次国に移管された。[11]

こうして，ソシエテ・ジェネラルは，62年には，2,784万フランの鉄道株（保有株式の35.7%）を保有していた。[12] 然し，全体としてソシエテ・ジェネラルは，株式の投機には慎重で，50年以降，旧来からの系列企業の持株を維持しつつ，国立銀行株やその他の鉄道株は，株主に割当てたり市場で売却しては，順次新規事業に進出していた。こうして，ソシエテ・ジェネラルの収益は依然その2/3が，株式の配当，社債利子によっており，有価証券取引より得られる利益は微々たるものであった。しかも，ソシエテ・ジェネラルは，製鉄・炭鉱双方を支配しているため，景気変動の中でも，安定した配当を受取ることが出来た。[13]

一方，貸方の部では，社債，約束手形が横這であるのに対し，当座借越が急増している。これは，1865年から，当座預金に2½%の利子が付けられ，

これまで，系列企業間交互計算や銀行間勘定にしか用いられなかった当座勘定が，一般預金をも吸収し始めたからであろう。他方，ソシエテ・ジェネラ

第22表　ソシエテ・ジェネラル貸借対照表

借　方	1851末	1860末	1865末	1869末	1873末
現金	9.8	8.0	5.6	6.0	3.7
商業手形	6.0	13.4	11.8	19.4	24.0
不動産	4.6	3.5	0.4	0.7	1.0
公債	7.8	2.1	4.9	11.5	16.2
貸付・ルボール	20.9	1.3	1.9	1.9	3.5
社債	4.2	8.1	12.5	15.5	0.8
株式	53.6	77.1	67.7	71.5	81.4
清算勘定	7.6	1.0	—	—	6.0
当座貸越	26.4	17.9	11.9	19.9	35.6
其の他	0.7	1.2	9.5	1.3	0.6
貸　方					
資本金	32.6	32.8	32.8	32.8	32.8
積立金	31.9	36.1	39.4	41.1	43.5
銀行券	10.6	0.3	0.3	0.3	0.3
貯蓄金庫	22.2	17.8	15.8	13.5	13.3
社債・約束手形	32.8	31.5	20.1	34.4	34.4
当座借越	8.1	9.4	6.3	20.1	35.2
其の他	1.7	1.9	7.4	1.4	—
損益	1.6	4.0	3.2	3.2	7.3
計	141.6	133.8	126.3	147.6	157.8

Chlepner, *Le Marché Financier* p. 64

ルは48年以来，利子引下げその他の方法で貯蓄金庫の預金の削減を図った結果，53年の残高2,250万フランが55年に1,885万に減じ，更に1865年の法律で国が元本を保証する一般貯蓄＝退職年金金庫 Caisse Générale d' Epargne et Retraite が設立されるや，預金の一部が吸収され，全体として零細預金が大部分を占めるに至った。[14)]

B　ベルギー銀行　これに反して48年恐慌を比較的容易に乗切ったベルギー銀行は，この期間経営方針を二転三転させ，幾度かの恐慌で大きな打撃を蒙っ

て結局没落せざるを得なかった。

ベルギー銀行は発券放棄後，国立銀行の再割引を後楯として専ら商業銀行として活動し，しかも，国立銀行株をはじめ手持の株式を売却して資産の流動性を強めた。そして，この間当座貸越が若干増加しているのを別にすれば，新規の参与はみられなかった。

然し57年，この銀行は突如方針を一転して投機銀行と化し，全国鉄道資材会社設立に参加して，スペイン，イタリアの鉄道株式・公社債の取引に従事したのみならず，自らもその保有高を急激に増大させた。然し，63—4年恐慌で手持の証券が暴落して手痛い損害を蒙ったベルギー銀行は，65年，その価格が回復していないにもかかわらず，損失を顧ずに手持の外国の株式・社債を売却した。そして，ベルギー鉄道事業の一方の中心人物であったフィリッパール Philippart（エノー炭鉱鉄道 Société des Chemins de Fer des Bassin Houillier du Hainaut，全国鉄道経営会社 Société Générale d' Exploitation des Chemin de Fer)と連繋して危険な投機を企てた。即ち，ベルギー銀行は，フイリッパール系企業に巨額の融資を与え，又，同系企業の株式・社債を大量に購入した。71年，エノー炭鉱鉄道は，国に買収され，株式の一部は確定利付公債，残りは，変動利付公債（当該鉄道の収益により利率決定）によって支払われたが，ベルギー銀行は，値上りを見越してエノー炭鉱から変動利付公債を買取ったり4分5厘社債と交換した。そして，この操作に必要な資金を得るため，手持の株式を売却したのみならず，73年3,000万（払込2,140万）の資本金を5,000万フランに増資した。しかし，76年行員キント T. Kint の費消事件（2,380万フランの損失及び株式減価130万）に加え，フィリッパールによるフランスのクレディ・モビリエ乗取失敗で1,500万フランの損失を蒙った。このため1880年には，1,500万フランに減資し，85年清算された。[15)]

なお，最後にこの時期のベルギーの外国事業投資について触れておきたい。ベルギー資本のドイツ進出は，コックリル家を別にしても，既に1830年代に始まるが，主に国境近くのアーヘンAachen，シュトルベルク Stolberg 等の

鉄，錫，亜鉛等の金属工業に限られていた。例えば，1838年には，J. Piedboeuf がアーヘンやデュッセルドルフに金属加工工場を設立し，37年，トゥ

第23表 ベルギー銀行貸借対照表 （百万フラン）

借方	1850	1855	1863	1868	1874
現金	7.9	1.3	1.3	2.5	4.9
商業手形	10.4	5.2	10.3	11.0	9.1
貸付	5.9	2.1	3.5	4.6	6.6
公債	—	0.1	1.6	0.8	10.1
国立銀行株	—	13.6	2.2	0.4	0.7
株式	8.5	3.6	5.6	5.6	19.4
社債（ベルギー）	—	—	6.1	6.5	5.8
社債（外国）	—	—	6.1	0.3	0.2
抵当証書	3.8	2.6	1.3	1.2	—
当座貸越（会社）	3.5	5.6	6.7	2.5	110.4
当座貸越（其の他）	2.6	2.8	6.8	10.8	
貸方					
資本金	27.0	19.4	21.4	21.4	50
積立金	0.8	0.4	1.2	0.7	10.6
銀行券	10.6	0.1	—	—	—
社債	—	6.0	14.7	7.5	11.8
当座借越（会社）	0.9	4.1	3.9	4.1	35.7
（その他）	2.6	3.8	8.7	10.9	
4分5厘社債	—	—	—	—	46.5

ールネーの Doignon et Blaton は，エルバーフェルトにガス工場を設立している。そして，1841年には，エッシュヴァイラー Eschweiler で Firma Tr. Michiels et Cie. が，輸入銑鉄による製鋼，圧延を始めた。この企業は，52年，ケルンの大個人銀行オッペンハイム Oppenheim の仲介でフランス資本を導入してフェニックス Phönix A. G. für Bergbau und Hüttenbetrieb として新発足し，同社は51年に設立されたフランス・ベルギー資本の「ライン鉱山製鉄会社」Société des Mines et Fonderies du Rhin, Charles Detillieux et Cie.（鉄鉱山と4基の高炉所有）と合併して後のルールの大独占企業の礎をなした。石炭では，47年，イギリス＝ベルギー・ラ

イン鉱業会社Englisch-Belgische Gesellschaft der rheinischen Bergwerke（デュッセルドルフ）がロートハウゼン Rothausen に鉱区を獲得し，52年，ライン＝ベルギー鉱山会社 Rheinisch-Belgische Bergwerksgesellschaft がこれを継承して，ベルギー系のダールブッシュ Dahlbusch 炭鉱会社の出発点をなした。又，56年，アルプレヒト・ド・フライテル Albrecht De Gruyter et Cie. もアルスターデンAlstaden 炭鉱を獲得した。一方，ザール＝ルクセンブルクでは，62年ザールブリュッケン鉄鉱＝精錬会社 Hütteuwerk Saarbücken とルクセンブルク鉱業会社 Société des Mines du Luxembourg (N. Berger & V. Tesch) がベルギー資本によって設立されている。ドイツ以外では，個人銀行ビショッフスハイムが53年スペイン資本と協同で，「スペイン鉛鉱会社」Société pour la production du zinc en Espagne（アストリア鉱山会社 l' Asturienne des Mines）を設立している他，フランス資本との合弁会社コルファリー会社 Société de Corphalie (46年) は，55年ジーガーラントの Siegerland のニーダー・フィッシュバッハ Niederfischbach で亜鉛の鉱山・製錬会社を設立，63年，同グループはオーストリア＝ベルギー金属工業会社 Société Métallurgique Austro-Belge を設立してオーストリアで幾つかの鉱山経営に乗出した。又71年は，ボヘミア炭鉱会社Société des Charbonnages de Bohèmeが設立され，ファルケナウ Falkenau 炭鉱を取得し，69年アントウェルペン・グルプによる，ベルギー・ヴィグスナエス鉱山会社 Cie.Minière Belge de Vigsnaes はノールウェーの同名の鉱山で銅，亜鉛の採掘に従事した。又，1866年に設立されたソシエテ・ジェネラル系の鉄道会社ベルギー鉄道 Société Belge de Chemin de Fer は，フランス東部のエペルネー鉄道（エペルネー＝ロミリー Epernay-Romilly，ザールブール＝ザールゲミーヌ Sarrebourg＝Sarreguemine，ナンシー＝ヴェズリーズ Vézelise）の建設を行なった。然し，在ドイツ企業の大部分は—ヴィエイユ・モンターニュ鉛鉱会社，ダールブッシュ，アルスターデン両炭鉱を別にすれば—その後の資本集中，金融資本の形成の中で，ドイツ系企業と合同し（フェニックス，アルベ

ッド，ゲルゼンキルヘン）ベルギー資本の支配力は失われたし，ソシエテ・ジェネラル等のベルギー大銀行も，ドイツの独占形成に全く痕跡を残していなかった。[16)]

さて，この時期に，オーストリア・ハンガリー帝国を舞台に，華々しい不動産抵当金融業務を展開したのが，かの「19世紀のジョン・ロー」ラングラン・デュモンソー André Langrand-Dumonceau であった。彼は，ベルギー，オランダで，主として生命保険会社（Royale Belge—53年，Vennootschap Nederland，58年）を設立し，ヴィーンに＜Der Anker＞生命保険をもって進出，60年，不動産抵当保険会社＜Vinds bona＞を同地に設立した。そして，彼は，主としてハンガリーで，貴族領への抵当金融と，農民への農地分譲，農業金融を営み，更にオーストリア・ハンガリーのみならず，フランス，ベルギーで農地や都市不動産の取引を行った。この間，彼は，ベルギーやオランダ，ドイツ，イギリスで多数の不動産銀行の設立に携わり，その資金をハンガリーに導入し，一方，ローマ法王庁に働きかけて，ハンガリーのカトリック教会と提携し，その巨大な富を自己の事業に引入れんと企てている。然し，彼の事業は66年恐慌で大きな打撃を蒙り，これに代る頼みの綱，カシャウ＝オーデルベルク Kaschau-Oderberg，ルメリア Roumélie 両鉄道事業も認可を取ったのみで資本を調達することが出来ずに終り，結局69年～73年にかけて，全事業が清算されてしまった。[17)]

1) クレディ・モビリエやロートシルトを中心とする鉄道建設については，R. E. Cameron, 'The Credit Mobilier and the economic Development of Europe' *Journal of Political Ecouomy*. LXI(1953) pp. 461—488. do., *France and the Economic Development of Europe* 1800-1914. Princeton, 1961. pp.145-326 この時期(1850—70)に，約120億フランのフランス資本が輸出されているが，これはフランスのこの期の純貯蓄の⅓～½に相当する。Cameron, *art. cit.* p.461. ベルギーでも，1853～58年，クレディ・モビリエ Crédit Mobilier Belge が，個人銀行（J. Bischoffsheim, E. Brugman, J. Oppenheim, De Pouhon）と，ベルギー銀行頭取の地位をすでに退いていた，Ch. De Brouckère によって計画されたが認可が得られず，又，アントウェルペン・グループの申請も同じく認可を受けることが出来なかった。蓋し，ベルギーの場合，既存の投資銀行が，これを代行し

えたからであろう。

2) Chlepner, *Marché Financier*. pp.51～3. A. van Schoubroeck, *L' Evolution des banqnes en fonction de la conjoncture de* 1850 *á* 1872. Gembloux, 1951

1864年恐慌は，南北戦争による棉花騰貴によって，東インド，エジプト，ブラジル棉の輸入が激増し，イギリスの正貨が流出したためで，短期間の金融恐慌に止った。これに対し，66年恐慌は，鉄道ブームの終期を劃するもので，63年に始まる鉄道を中心とする拡張，殊に南北戦争終了に伴う，イギリスの資本輸出，鉄道資材輸出による過剰生産に起因した。この恐慌で，ロンドンのオーヴァレンド・ガーニー商会 Overend, Gurney & Co. が支払停止に陥っている。メンデリソン，「恐慌の理論と歴史」第2分冊，第12章

3) <Cie. Générales de Materiel de Chemin de fer>は，合資会社 Pauwels et Cie. (Molenbeek に製作工場所有)を継承したもので，更にパリ郊外クリシー Clichy にも工場を建設したが，このために大きな損害を蒙り，1866年の恐慌で保有証券が暴落して，解散した。<Cie. Centrale>も株式・社債による受註のため，66年危機に陥り，その工場を Société d' Exploitation(Phillipart) に譲った。Chlepner. *op. cit.* p.51.

4) これら個人銀行の大部分は，ヴィーン会議以後ベルギーに移住して来た外国系である。例えば，ビショッフスハイムは，マインツ出身のアムステルダムの個人銀行 L-R. Bischoffsheim のアントウェルペン支店として発足し，30年以後ブリュッセルを本拠とし，De Hirsch と合名企業 Bischoffsheim-De Hirsch となった。なお，63年，同行は，既に50年にパリに移転していた L.R. Bischoffsheim と，パリ預金銀行 Banque de Dépôt de Paris を設立，72年パリ銀行 Banque de Paris を吸収し，有名な「パリ・オランダ銀行」Banque de Paris et Pays-Bas が生れた。同行は，ベルギーでも，Bischoffsheim の地盤を継承して，様々な金融活動を行なった。

Brugman は，1888年Basler et Cic に継承され1909年ドイツ銀行 Deutsche Bank の代理店となった。

J. Oppenheim は，1857年，ヴェネチアより来住した個人銀行 J. Errera と Errera-Oppenheim 銀行を設立した。また，マグデブルク出身のユダヤ人 Fr. Philippson は，71年，Philippson-Horwitz et Cie. を設立し，又，Cassel も，1838年にブリュッセルで個人銀行を設立したものである。又，アントウェルペンの Krelinger はカルルスルーエ，Giesar は，エムス出身。Chlepner, 'L' Etranger dans l' histoire économique de la Belgique.' pp.724—6.

5) 「スペイン北部鉄道」は，マドリッドーイルン Irun-フランス国境線633Km，ベンタ・デ・バノズ Venta de Banos—アラル・デル，レイ Alar del Rey 91Km 合計724Kmの路線，資本金は2億フランであった。61年着工，64年完通。Stürmer,

a.a.O. S.179.

6) Chlepner, *op.cit.*p.52支払停止に陥ったのは，Toscana Centrale. Livornesi, Varna, Granollers, Bra, Cordova-Malaga, Nederlandsche Centraal.

7) パリの個人銀行，Hottinguer, Mallet, Louis de Frémy, Baron de Haber. により64年設立，Cameron, *art. cit.* p.483.

8) L. Avakian, 'Le rythme de développement des voies ferrées en Belgique de 1834 à 1935. *Bulletin de l' Institut de Science Économique.* Université Catholique de Louvain, VII. (1933) Tableau Annexes. Chlepner, *op.cit.* p.56.

9) *Le Centenaire de S.G.* p.107. ソシエテ・ジェネラルは61年に，北部鉄道株の8割を手放している。Malou, *op.cit.* Annexe XXIV

10) *Centenaire*, p.108

11) *ibid.* pp.117—8.

12) Malou, *op.cit.* Annexe XXIV

13) 第40表．石炭業は，1852年と63年が不況のどん底にあり，56年，63年が活況のピークであったが，製鉄業はこの石炭の高騰によって不況に陥った。しかし，混合企業は，この影響を全く受けていない。同じく66～7年の不況の時期にも石炭部門の方は活況を呈していた。A. Wibail, 'La conjoncture économique de la sidérurgie belge 1830—1913.' *Bulletin de l' Institut des Sciences Economiques Uuiv Catholique de Louvain.* V (1933). pp.52. ソシエテ・ジェネラルは，この間石炭企業の集中を進め，51年 Société des Charbonnages réunis à Cbarleroi を68年，Société des Charbonnages Unis de l' Ouest de Mons を設立し，新たに，Nord du Charleloi (50年) Grand-Buisson (57年)，Basse-Sambre (56年) Espérence et Batterie, Val Benoit (56年) に参与した。*Centenaire*, p.96.

14) 貯蓄金庫の預金口座は48年の19,025より55年に26,153に増加している。*Centenaire*, p.75. なお，本来の意味における預金は，1869年，当座預金総額2,085万中，1,250万，73年には，3,517万中1,150万フランであるが，口座数は71年で423に過ぎない。この中には，地方公共団体の債券発行による一時的預金も含まれる。Chlepner, *op.cit.* p.65.

15) Chlepner, *op.cit.* pp.67—8. S. Philipart は，1874年，フランスの鉄道網に支配の手を延ばさんとして，その株式を保有するクレディ・モビリエの乗取を企てた。まず，彼は，74年，「ベルギー商工銀行」Banque Belge du Commerce et de l' Industrie (Banque de l' Union, Banque de Travaux Publics et du Crédit Industirel Français により72年設立）のフランス系の株式を買収してその経営を支配するや，その資金をもってクレディ・モビリエ株の買占めを図ったが，

敗れ，結局，この銀行に800万フランの損失を与えて破産させた。続いて彼は79年，破産宣告が満了するや，ヨーロッパ銀行 Banque Européenne pour favoriser l′ industrie, le commerce et l′ agriculture（資本金2,500万フラン）の設立にかかり，自らその4/5に応募し，パリの La Presse その他の新聞を買収して，宣伝に務め，再度8,500万を募集し，再びクレディ・モビリエ乗取の買占めに向った。この銀行の株は，800フランまで高騰し，フィリッパールは，この相場を維持するため，大量の買付を自ら行なったため，株価崩落後，パリから逃亡した。結局，ヨーロッパ銀行は，差額700万フランを弁済せざるを得なくなり，又，フィリッパールは第2回の募集の際に，彼のもとの事業，フランス・オランダ銀行の株式による払込を認めたが，それは，半額しか払込まれておらず，同行の破産に当って清算人から残額支払を要求された。このため，ヨーロッパ銀行は，更に600万フランを支払うことを余儀なくされ，80年破産した。

16) Chlepner, *op.cit.* pp.50,53. L. Frère, *op.cit.* pp.143,148. J.R. Maréchal 'La contribution des belges et des français à l′essor de la grande industrie Allemande. *Revue Universelle des Mines*. 8é série XIII (1937) 1872年年に，ケルンの S. Oppenheim & Cie.，ヴィーンの Creditanstalt，アントウェルペンの Banque Centrale Anversoise がドイツ＝ベルギー・ラプラタ銀行 Deutsch-Belgische La Plata-Bank を設立し，73年ドイツ銀行も出資した。しかし，ウルガイ政府への融資が焦付いて，75年破産。

17) cf. G. Jacquemins, *Langrand-Dumonceau, Promoteur d′ une puissance Financière Catholique*. 5tomes, Bruxelles. 1960-1963. 主要な企業は，この他 Les Rentiers Réunis, '57. Banque Hypothécaire Belge. '60. Banque de Crédit Foncier et Indnstriel. '57. Algemeene Mij. voor Handel en Nijverheid. '63. Ned. Hypotheekbank '61. Banque de Crédit Foncier. '63. International Land Credit Co.2億フラン '64. Sachsische Hypothekenbank '64. Banque Internationale de Crédit Agricole 1億フラン '65. Banque Général pour Favoriser l′ Agriculture et les Travaux Publics 3億フラン，64があり，いずれも，株式会社の認可をベルギーでうることが出来ず，合資会社又は，英国籍の株式会社の形成をとった。

Ⅳ　ベルギーの対外進出と銀行資本—(2)　独占形成期（1873—1914）

1873年以降の大不況の中で，外国市場への依存度の著しく高いベルギー工業は，大きな打撃を蒙ったが，それに止らず，世界経済の構造変化と，独占形成（錬鉄より鋼鉄への移行，化学・電気産業の登場）の中で自らもこれに対処して，新たな地位を確保する必要に迫られた。かくして，ベルギーは，

資本輸出を通じて，その狭小な国内市場を補完する輸出市場を開拓して行く途を選ばざるを得なかった。そのため，ベルギーは，ブリュッセルの証券市場を通じて，フランス等の外資を吸収しつつ，旧ロシア，イタリア，スペイン，エジプト，更には中国，南米，コンゴに多数の製鉄，電気，鉄道，化学企業を設立して行き，帝国主義列強の一翼をなした。以下，この時期におけるベルギー経済の構造の変化と，銀行資本の役割を分析してみよう。

§1 生産の集積と独占体の形成

ベルギーは，19世紀の30年代以降，他の諸国の立遅れの中で，ヨーロッパ大陸の最先進国としての地位を確保して来たため，大不況期には，漸く産業革命を終了したドイツと較べ，その対応は遅れ，電気・化学等の新興産業の分野でもドイツの後塵を拝するのみであった。そして，90年を過ぎてから漸くドイツ，フランスを模して，鋼鉄生産では再び重要な位置を取戻すことが出来たとはいえ，全体として，生産の集積＝資本の集積・集中（独占形成）は，ドイツ・フランスに比してかなり立遅れた儘，第一次大戦を迎えたのである。

A 鉄 鋼 業 約30年間，その錬鉄レールの生産では，その優秀な技術と低い生産費をもってヨーロッパ市場で名声を恣ままにして来たベルギー製鉄業は，最後まで錬鉄生産に執着して，フランスのノール地方と共に，鋼鉄生産への切換が最も遅れた地方となった。ベルギーにおける鋼鉄の大量生産は，1863年にコックリル社が，71年にはアングレール製鋼 Acieres d'Angleur が，それぞれベッセマー転炉建設したのに始まるが，周知の通りこの方法は低燐鉄鉱石を使用するか，もしくは外国のベッセマー銑鉄を輸入しなければならず，そのコスト高によって，錬鉄を駆逐することが難かしかった。しかも，この頃から，これまでベルギー製鉄業に絶好の立地条件を賦与して来たサンブル＝ミューズ Sambre-et-Meuse 河谷の赤鉄鉱はベルギーの増大する需要を賄うことが出来なかったのみならず，その絶対量すら減産を示し，ルクセンブルクからのミネット鉱輸入が激増した。一方，ベルギーの炭坑も，製鉄業の要求する上質コークス炭を十分に供給し得ぬため，ルールや，

イギリス炭が，国内に迄進出して来る。こうした状況の中で，ベルギー製鉄業は，ドイツに倣って，ミネット鉱にあるトーマス製鋼法を積極的に採用すべきであったにも拘らず，依然としてそれに消極的であり，90年に至っても幾つかの製鉄企業が初めてベッセマー転炉を建設した程であった。然し，機械生産を中軸とし，而も，スペインに確保した鉱山より自社の専用船で鉱石を輸入するコックリル社の場合を除いては，いずれもその高いコストの故に成功せず，他の国では既に転落した錬鉄生産がベルギーで93年に至っても鋼鉄の2倍に及ぶ有様であった。こうして，ベルギー製鉄業は，その銑鉄生産では，ロシア，オーストリアに追抜かれ，ドイツ鉄鋼業の躍進の中で20年近く停滞し続けた。そして，漸く1893年以降本格的にトマス鋼生産に転換し，97年のブリュッセル大博覧会において，はっきりとその進歩の跡を世界に顕示した。そして，関税障壁によって遮られたロシア帝国に対しては資本進出によって，その製鉄業の過半を押さえ，又，隣接のルクセンブルク，ドイツ（ロートリンゲン），フランス（ロレーヌ）で，鉄鉱石や製鉄所を取得して行なった。以下，主要な製鉄企業の集積・集中の過程を追跡してみよう。[1)]

コックリル株式会社　機関車・兵器生産を始めとする機械製作部門を中心に，製鉄，石炭部門を結ぶこの巨大な混合企業は，更に1872年，アントウェルペン（ホボケン Hoboken）に造船所を建設し，他の企業と異り機械，兵器・造船部門によって安定した収益を上げていた。92年に導入したベッセマー鋼生産は技術的に良い成績を収めず，鋼鉄レールを原価を割って販売せざるを得なかったが，漸く71年，4つの転炉で本格的生産に乗出し，74年三つの新しい高炉で日産4～50トンのベッセマー銑鉄を生産して，イギリスへの依存を断ち，75年にスペインのソモロストロ鉱山会社 Société franco-belge des Mines de Somorostro 設立に参加し，4隻の鉱石専用船による輸入を行なった結果，ベッセマー鋼生産に附随する原料問題を解決した。又，88年には，大砲用のマルティン平炉を建設している。この結果，トマス法導入は著しく遅れ漸く1908年に始まるが，既に1888年に，リューメリンゲン Rümelingen（ルクセンブルク）に，97年にはエッティンゲン Öthingen（オタンジュ Ottange，ドイツ領ロートリンゲン）で208*ha*の鉱区を獲得，1903年には Mouton, Amermont-Domamary 両鉱山会社を支配していた。1911年にはミューズ鋼管会社 Société des Tubes de la Meuseに参与している。一方，86年には禁止高高税関によって事実上失われたロシア市場を取戻すべく，「ワルシャワ製鋼」と合弁で，クリヴォイログに南ロシア＝

ドニエプル製鉄株式会社 S.A. des Métallugique Dniéprevienne du Midi de la Russie を,95年単独でニコライエフ造船所 Soc. des Chantiers Naval, Atliers et Fonderies de Nicolaiev, 94年には，アルマズナイヤ炭鉱会社を設立している。又，中国にも，後に述べるように積極的に進出した。上記の如き急速な企業成長の中で，その設備資金調達のため,71年1,250万より1,500万への,1904年には3,000万への増資が行われ，又78年，3,000万フランの社債を発行している。然し大規模な銀行からの借入，特定銀行との強い結びつきは認められない，[2)]

ウーグレ＝マリエーS .A. des Hauts-Fourneaux et Charbonnages d′ Ougrée-Marihaye ウーグレ製鉄は73年以降，銑鉄の販路閉塞に苦しみ，高炉をベッセマー銑用に改造したが，転炉は82年に漸く建設された。（トマス鋼は98年）一方，ウーグレ鉄工 Fabrique de Fer d′ Ougrée は，鋼帯の製造で利益を上げており，鋼材の販路確保を狙うウーグレ製鉄は，92年これを合併して，ウーグレ株式会社を名乗った。92～1900年の好況期には，レールへの偏りを避け，鋼小梁，型鋼の生産を拡大し南米，極東，ロシアにその販路を求めた。又，95年，コックリル，エスペランスに続いてロシアに子会社，タガンログ Taganrog 製鉄を設立した。又，1900年には，マリエ炭鉱株式会社 S.A. des Charbonnageo de Marihaye とその在ロシア企業，ウーペンスク炭鉱会社を合併した。然し1901～2年の不況で，そのロシア企業は大きな損失を蒙り，ウーグレ株式会社は，その後は，専ら近隣のルクセンブルク，フランス（ロレーヌ）のミネット地帯で，鉄鉱山や製鉄所を買収して行なった。1903年には，シエ及びヴィリュー＝モレーン両製鉄 S. des Hauts-Fourneaux de la Chiers. S. des Forges de Vireux-Molhain を計2,290万フランで買収し，1905年には，ルクセンブルク（ドイツ関稲同盟内）のロディンゲン製鉄株式会社 S.A. des Hauts-Fourneaux de Rodange (Rodingen) を支配し，又，国内でも，ミューズ鋼管,シャトリノー製鉄に参与し，ミネット地帯とベルギーを結ぶ。石炭・鉄鉱山，製鉄を含む一大コンツェルンを形成し，ベルギー第一の生産量を誇った。[3)]

エスペランス＝ロンド製鉄 S.A. Métallurgique d′ Espérence-Longdoz.専ら銑鉄生産に携って来たこの会社は，漸く63年に，加工部門として，薄板・ブリキのメイカー Dothée et Cie. (Longdoz)を合併した。然し不況の中で，77年資金確保のためその炭坑をコックリル社とマリエー炭鉱会社に譲渡じた。その後隣接の製鋼会社アングレールが81年にベルギー最初のトマス転炉を建設するや，エスペランスはミネット鉱による銑鉄を供給する契約を結んだ。92年に同製鋼が「スクレッサン製鉄」と合併するやこの販路が失われたが，丁度この頃から多数のトマス転炉が建設され，これを償うことが出来た。そして1908年には，自らもトマス転炉を所有するに至る。一方，ロシアには，95年進出し，「トゥラー製鉄」S.A. des Hauts-Fourneaux de Toula (2/5出資）を設立し，99年には「トゥーラ圧延」Laminoire de Toula（5/2参与）を設立した。然しトゥーラ製鉄は，補助鍛鉄所買収のための資金を増資することが出

来ず，250万フランの負債を負った儘1912年破産した。圧延会社も本社より150万フランの借入を行ったが，1908年これを完済し，上質薄板の生産では重要な企業となった。

エスペランス社も，1906年，ローレのヌブリエー Briey で，St. Pierremont, Sezey, Conflans，の諸鉱山に，ゲルゼンキルヘン製鉄，Gelsenkirchens Bergmerks A.G. コックリル，ウーグレと共に出資を行なっている。[4)]

ソシエテ・ジエネラル系諸企業　これ迄，ベルギー製鉄業を主導して来た，三つの製鉄企業は大不況中で大掛りな再編を受けねばならなくなった。まず，石炭業は，製鉄業にとって何等の利点も与えなくなったため，マルシネル＝クイエMarcinelle et Couillet とシャトリノー Châtelineauは，後者の石炭部門を切離し (Soc. de Charbonnage du Gouffre) 合併してクイエ製鉄S.A. de Couilletとなり，スクレッサン製鉄も，85年その石炭部門を独立させ (Soc. de Charbonnage de Bassin d′ Avroy) 資本金350万フランの製鉄会社として新発足した。然し90年以降，市況が回復しても鋼鉄の競争に苦しめられた結果，92年，同社は既にトマス鋼生産に十分な設備を擁していたアングレール製鋼 Acierie d′ Angleur と合同し，クイエも93年トマス転炉建設に踏切った。95年には，ソシエテ・ジェネラルは，アングレール，サン・レオナール製鋼 St. Léonard と共に，ペテルスブルクの「外国銀行」の参加を得て，ロシア＝ベルギー製鉄会社 S.A. Métallurgique Russo-Belge（資本金800万ルーブル＝2,166万フラン）を設立し，同社は，南ロシア＝ドニエプル製鉄と肩を並べる，南ロシア最大の優秀企業となった。然し，クイエ製鉄は，1900—1905年の不況で1,200万フランの損失を出し，その石炭部門を切離し，設備をフランス資本のエノー会社 Usine de Hainaut に貸与し，続いてこれを同社に譲渡するに至った。[5)]

なお，このような，ソシエテ・ジェネラル系の不振に引換え，「鋼の時代」に入ってから，幾つかの巨大な製鉄企業が誕生している。例えば，サンブル＝モーゼル S.A. Métallurgique de Sambre-et-Moseslle.（ドイツ系，1898年 Forges et Usine de Monceau-sur-Sambre を基に発足）アトゥス＝グリヴニェ S. A. d′ Athus-Grivegnée，プロヴィダンス Providence，テイ・ル・シャトー Thy-le-Château等。[6)]

さて，1913年におけるベルギーの主要な鉄鋼生産を示すものが第24表である。ここでは，技術的な連関を持たぬ在ロシア企業は考察から外すとして，一応，ルクセンブルク，ローレヌにおけるベルギー企業の生産高をも含めた。この表に掲げた諸企業は，ベルギーの鉄・鋼生産の85%を占めているから，一見した所，生産の集積の度合は著しく高いように見えるが，経営規模からいっても，企業規模から論じても，その集積は，ドイツ，フランス，ルクセンブルクの大企業に比して著しく劣り，一工場当りの製鋼能力は，イギリス

第24表 ベルギー主要鉄鋼企業 1913年現在 単位千トン

	銑鉄	鋼鉄
1 Ougree-Marihaye*	396〔+271〕	270〔+151〕
2 Sambre-et-Moselle	360	270
3 Hainaut	250	135
4 Cockerill	230	180
5 Providence*	170〔+190〕	195〔+185〕
6 Espérnce-Longdoz	170	135
7 Thy-le-Château	155	155
8 Athus-Grivegnée	190	115
9 Monceau-St. Fiacre	145	80
10 Clabecq	120	110
11 Châtelineau	95	40
12 Angleur	95	90
13 Musson	35	—
14 Usines Boël	120	120
15 Sud de Châtelinleau	35	30
16 Halanzy	35	—
17 Mont Cheret	—	30
18 Union des Acieries	—	12

Pound and Parker, *op.cit.* p.371

*〔 〕内ルクセンブルク及びローレヌ所在工場を表示

第25表 高炉一基当り平均年生産 （単位：トン）

	ベルギー	ドイツ	イギリス	アメリカ	フランス
1870	12	7	9.15	6.5	4.43
1880	20	11	14	8.75	8.6
1890	22	21	19	30	16.5
1900	27	31	22.5	60	22
1905	32.755	40	26	100	25

De Laveleye, 'Aperçu historique de la sidérugie belge. *Revue Economique Internationale*. Juin 1911. p.15

とさして変らなかった。そして，従来ベルギーの備えていた銑鉄生産における技術的優位も，ドイツに破られている。（第25表）然し，ベルギーの場合は，イギリスと異って，90年代から，ミネット鉱によるトマス鋼生産に転換

第26表　製鉄労働者賃金の国際比較　（マルク／日）

	1870	1880	1890	1900
リエージュ	3.01	3.14	2.90	2.65
パリ	4.01	4.46	4.64	5.16
ベルリン	—	—	4.76	5.87
ロンドン	6.13	6.48	6.48	—
ボストン	14.65	10.24	10.13	—

P. van Moeseke, *op.cit.* p.315

第27表　製品輸出価格　（シリング／トン）

棒鋼

	ドイツ平均	ベルギーf.o.b.	イギリス北東海岸
1891—1895	106	96	108
1896—1900	126	120	122
1901—1905	102	100	125
1906—1910	105	105	133

レール

	ドイツ輸出(国境)	ベルギーf.o.b.	イギリスf.o.b.
1890—1894	96	92	92
1895—1899	102	90	90
1900—1904	103	99	112
1905—1909	108	106	116

D.L. Burn, *The Economic History of Steel Making*. Cambridge 1940. pp.103,109

第28表　ベルギー鉄鋼業の製品構成　（1,000トン）

1912年

銑鉄消費　3,069
（生産 2,303
輸出 −17
輸入 780）

- パドル銑　151＋屑鉄192……完成品 335
  （国産 67
  輸入 84）
- 鋳物銑　95……鋳物 73
- 製鋼用銑　2,700＋屑鉄 225……粗鋼 2,515
  （国産 2,138
  輸入 562）
  - トマス鋼 2,252
  - 平炉鋼 190
  - 第一次鋳鋼 62
  - →鋼塊 1,527
- 特殊銑……電気鋼
  特殊鋼
  （国産 18
  輸入 19）

加工品	1,903			
鋼片	610	線材，棒鋼，棒軸	144	
型鋼	177	屈線，たが		
軌条	339	薄板，厚板	251	
帯鋼，車軸	40	ブリキ	119	
梁	214	鍛鋼	9	

H. Gehrig u. H. Waentig, hrsg. von, *Belgiens Volkswirtschaft*. Leipzig u. Berlin SS.178

第29表　ベルギー鉄鋼製品輸出入　（機械を除く，1912年度）

	輸出		輸入	
	数量（万トン）	金額（万フラン）	数量（万トン）	金額（万フラン）
半製品*	11.2	1,410	8.8	1,400
加工鋳物	2.35	370	0.65	100
梁，棒鉄鋼	9.8	1,440	0.18	30
軌条	17.3	2,410	0.69	95
薄板	19.5	3,260	2.52	420
其の他	63.2	10,930	4.16	1,090

Belgiens Volkswirtschaft S.179

* 第一次鋳物，鋼片，鉄鋼塊，厚板，未加工薄板

第30表　鉄鋼製品輸出構成の国際比較　1913年（単位1万トン）

	イギリス	ドイツ	アメリカ	ベルギー
銑鉄	112.4	85.6	28.7	1.7
鋼塊，鋼片	0.4	70.1	23.0	15.9
軌条	50.7	50.1	45.3	16.5
構造鋼	12.2	55.7	36.7	9.6
厚板	13.6	46.1	29.5	19.6
薄板	14.0	14.9	13.3	
亜鉛鉄板	76.2	5.4	11.5	0.6
ブリキ	49.4		7.3	
棒鋼，型鋼，帯鋼	43.8	117.3	27.2	65.0
線材	6.1	46.3	30.0	6.6
錬，鋼管	16.5	30.7	28.2	0.6
鋳物管	23.5	7.3		

* シート・バーを含むと考えられる。　Burn, *op.cit.* p.331

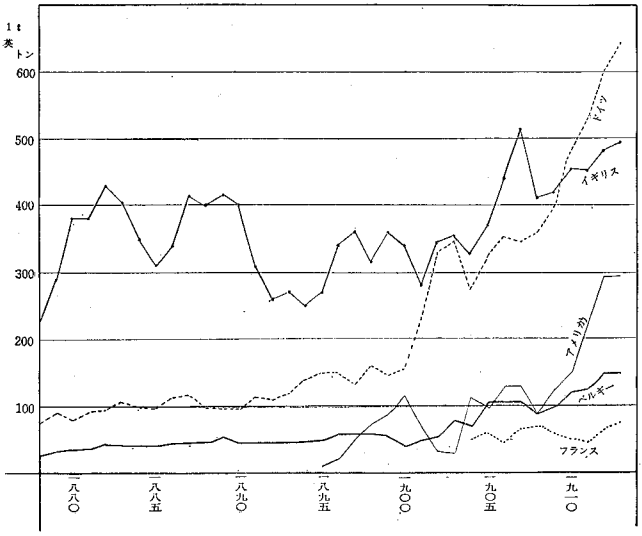
第31表　第一次大戦前主要国粗鋼生産高　　（単位：千トン）

年　次	イギリス	アメリカ	ドイツ	フランス	ベルギー	世　界
1870	230	70	170	61	4	700
1875	719	396	347	230	54	1,900
1880	1,316	1,267	733	368	132	4,400
1885	1,918	1,739	1,203	535	155	6,300
1890	3,636	4,346	2,232	683	248	12,400
1895	3,312	6,213	4,025	876	455	16,300
1900	4,979	10,351	6,646	1,565	655	28,300
1905	5,908	20,344	10,067	2,255	1,227	45,220
1910	6,476	26,512	13,699	3,413	1,945	60,500
1913	7,786	31,802	18,935	4,686	2,467	76,500

J.C. Carr and W. Taplin, *History of the British Steel Industry*. Cambridge Mass. 1962　ベルギーは C. Reuss et al., *op.cit*. Annexe statistique 8.

第6図　主要国鉄鋼輸出高

D.L. Burn, *op.cit*. tables Ⅲ, Ⅴ, Ⅳ, Ⅷ, XXVI



し，炭鉱の一部やコークス炉を保持し，ガス・エンジンも積極的に利用する等，混合企業としての利点をある程度まで活用し得た。そして，ベルギーは，その相対的低賃銀を武器として，大量生産の可能な，半製品，第一次加工品，レールの輸出を増大させた。1905年以降は，レールの比重が低下し，代ってイギリス市場を主とする半製品，第一次加工品の輸出がその主力をなしている。[7]

このように，輸出依存度の著しく高い—約60%—ベルギー鉄鋼業にとっては，高率関税による国内市場独占と外国におけるダンピングは無意味で，73年に自由貿易体制に移行してからは，関税は10%に止った。そのため，国内のカルテルもいずれも短命に終り，最初の本格的鉄鋼カルテル（1905年）は，むしろ,国際レール・カルテル International Rail Pool に対応して出来たものであった。これは9つの企業の共販会社 Comptoire des Acieries Belges の形をとったが，輸出については，何等の拘束力ももたなかったのである。[8]

B 石　炭　業 産業革命以来ベルギーの経済発展の重要な支柱であった石炭産業は，大不況以降，深刻な危機に直面するに至る。早くから炭坑が開発されていたため，度々企業集中が行われたにも拘らず，大小多数の業者の坑区が錯綜し，いきおい，合理化が妨げられることとなった。炭層の深化に伴って，生産費は上昇する一方であったのに引換え，生産条件の勝ったルールや北フランス（パ・ド・カレー Pas de Calais)炭田との競争で，ベルギー炭はルクセンブルクや東フランス市場から追われ，国内市場にすらルール炭の侵入を見た。ベルギー石炭生産量の約⅓を支配するソシエテ・ジェネラルは，勿論，その支配下にある企業の集中と合理化を進め，68年には，西モンス連合石炭会社 Société des Charbonnages Unis-Ouest de Mons を発足させ，又，カルテル結成に指導的役割を演じた。然し，夥しい群小炭坑までも全国カルテルに統合することは難しく，せいぜい地域カルテルが不十分な機能を発揮したに止った。そして1900年以降コークス炭の不足が著しくなるや，ドイツ炭が隣接のリエージュ地方のみならず海路アントウェルペ

第32表　ベルギー石炭生産及び輸出入　1912年度（百万トン）

採掘高	22.97
輸出高	7.08
石炭	5.06
コークス*	1.46
ブリケット**	0.57
輸入高	9.78
石炭	8.13
コークス*	1.25
ブリケット**	0.40
国内消費	25.66

Belgiens Volkswirtshaft, S.154

* 石炭量に換算　76.5%

** 石炭量に換算 110.0%

ンにも送られた。こうしてベルギーは，依然その生産高の⅓弱を輸出したとはいえ，これを上廻る輸入を余儀なくされ，就中コークス炭の⅓を外国に仰いだ。（第32表）コークス生産は全国に22企業38工場を数えたが，1894年，全ベルギー・コークス・カルテル Syndicat des cokes Belge が，製錬所の自家生産を除く，市販コークスの殆んど—約40%—を支配し，ドイツのルール・コークス・シンディケートと協定を結んだ。このためコークス炉のみは石炭業に比して安定した利潤を得ることが出来たが，ソシエテ・ジェネラルは，ここでも主導的役割を演じている。なお，採算の悪化したエノーに代って，北部のケンペン（カンピーヌ）Kempen (Campine) 炭田が開発され始めたが，ソシエテ・ジェネラルは，1907年 Société des Charbonnages André-Dumont sous Asch, Société de Recherches et de l' exploitantin André-Dumont sous Asch 両社の株式の大部分を引受け，S.A. des Charbonnages de Beeringen にも重要な参与を行なっている。

C 亜　　鉛　ベルギーは，ヨーロッパ第二の亜鉛生産国で，世界の粗亜亜鉛の20%を生産していた。この分野には9つの株式会社を含む11の企業が，600の炉と5万の坩堝，6つの圧延工場（35の圧延機）を擁し，8,500人の精錬，750人の圧延労働者を雇傭していた。このうち，最も古く，

最大の企業は，ヴィエイユ・モンターニュ鉛業会社 Société des Mines et Fonderies de Zinc de la Vieille-Montagne（1805年創立，37年ベルギー銀行の援助で株式会社へ改組）で，ベルギーの粗亜鉛生産の36.5%を支配し，ドイツのギーシエ Giesche と並ぶ国際企業であった。同社はクレディ・モビリエ等のフランス資本の出資で，国内のみならず，スペイン，フランス，イタリア（サルディニア）テュニス，アルジュリア，ドイツ，スウェーデン，イギリス等に鉱山を取得し，その精錬圧延工場は，国内のアングレール Angleur，サン・レオナール St. Léonard，ヴァランタン・コック Valentin-Cocq フローヌ Flône の他，ドイツ（Oberhausen, Neu-Wesel, Borbeck），フランス（Viviez-Penchot, Lavallois Dangu, Haumont）にも多数の工場を所有する。この会社は，著しい過小資本（1860—1914年911.25万フラン，1914年1,200万）の儘で過し，内部留保と，一部借入れによって資金を調達して来た。ソシエテ・ジェネラルは，1851年300万フランを融資し，52年に2,000株を所有，55年に交互計算勘定を開いているが，大戦直前の時点では，同社との緊密な金融上の結びつきは認められない。[10)]

D 化 学 19世紀末の大不況からの脱出を支える要因の一つとなった化学工業においても，ベルギーは，タール染料工業でドイツに圧倒された。然し，ガラス工業と結びついたソーダ工業では，これまでのイギリス，フランスのルブラン Le Blanc 法による独占を打破る，アンモニア＝ソーダ法を発明したソルヴェー Ernest Solvay が，その量産化に成功し，忽ちにして，ヨーロッパ，アメリカに跨る大コンツェルンを形成した。ソルヴェーは，61年特許を得，63年に，弁護士ピルメ Eudore Pirmez の出資でソルヴェー合資会社を設立したが，65年経営が危機に陥り，ランベール Lambert が新たにこれに加わった。そして，73年量産（日産12トン）に成功した後は，ル・ブラン法を急速に駆逐して行った。ソルヴェー社は，ドイツ5，フランス2，オーストリア・ハンガリー，スペイン，イタリア各1の工場を設け，イギリスでブルンナー及びモンド Sir John Brunner, Ludwig Mond と，ロシアではリュビモフ J-J. Lubimoff(Société Lubimoff, Solvay et Cie)

と，アメリカではハザード，R.C.Hazard (Solvay Process Co.)と提携して，合弁会社を設立した。そして，これらのソルヴェー系工場は，1912年には160万トンのソーダを生産した。うちベルギーの工場 (Couillet) は，3万トンを占める。ベルギーは，この他ドイツから5,000トンを輸入し，他方1万トンを，スカンティナヴィア，オランダ，イタリアに輸出していた。食塩は，ソルヴェー社がドイツに所有する塩山より，アンモニアは，国内のコークス炉より供給されている。このように，ソルヴェー社は，その巨大な特別利潤をもとに蓄積を進めて来ており，最近までその同族企業の形態を改めることがなかった。[11)]

電　機　19世紀末まで，ドイツの電機産業に全面的に依存していたため，ベルギーの当該産業は不振を続けていた。わずかに，78年に誕生した Atelier Turbine が68年 Electricité et Hydraulique となって細々と生産を続けていたが，1900年恐慌と，ロシアにおける損失で破産に瀕した。これが救ったのが，後に述べる，ヨーロッパ各地に多数の電鉄会社を経営するアンパン男 Baron d′ Epmain で，彼の手で，資本金300万フランのシャルルロワ電機製作会社 Société des Ateliers de Construction Électripue á Charleroi が誕生した。この会社は，12年1,200万に増資され，大戦前夜には1,800人の職員と5,800人の労働者を雇傭していた。その製品は，発電機，蓄電器，市電用モーターを主とし，ドイツの大企業には及ばぬにせよ，ベルギーの電鉄資本と結びつつ，世界市場に一定の地位を確保しえたのである。（第33表）

第33表　ベルギー電機工業生産及輸出額　（1万フラン）

	生　産	輸　出
発電機・変圧器，配電盤	1,300	360
電信電話器，拡声機，報知機	600	580
電線，絶縁ケーブル	320	85
蓄電池	100	10
電球，炭素棒，開閉器	110	5

Belgiens Volkswirtschaft. S.183

F ガラス工業 ベルギーのガラス工業は，ヨーロッパにおいて有力な地位を占め，1912年現在，69企業（76工場3,200人）中46が株式会社（資本金総額5,500万フラン）でドイツ，フランス，オランダ，オーストリア，イギリス，アメリカ資本が参与していた。うち24工場が窓ガラス（15,000人），10が鏡（7,500人），壜工場3（850人），クリスタルガラス工場4及び装飾ガラス工場30（7,500人）特殊ガラス5工場（850人）であった。このうち，クリスタル・ガラスのヴァル・サン・ランベール会社 Société de Val-St. Lambert（1879年設立300万フラン）は，世界第二の生産を誇り5,000人以上の労働者を雇傭する。同社は，ソシエテ・ジェネラルの子会社 Manufacture de Glace と Cie. des Cristalleries et Verreries Namuroise の設立にかかるが，1902年前者が破産し，ソシエテ・ジェネラルは社債と引換に，同社の株式を取得した。ベルギーのガラス工業の輸出依存度は著しく高く(5/6)うちイギリスが1/3を占め，残りをアメリカ，カナダ，南米諸国，オーストラリア，中国，日本等で分け合っている。ガラス工業は，既に第一次大戦前から強力な国際カルテルの形成された分野で，ベルギーはその中心であった。例えば，1912年の国際鏡カルテルInternationale Spiegelglas-syndikat は，ドイツ，ベルギー，オーストリア，オランダ，イタリア，フランスの殆んどのメーカーを組織し，ブリュッセルに本部を置き，世界産額の約半ばを支配（うちベルギーの割当は25%）した。又，1912年から，原料・半製品の購買カルテル（ドイツ，オーストリア，オランダ，フランス，ベルギーの13企業）Union continentale commerciale de Glaceries に5つのベルギー企業が参加している。又，国内では，カナダ，インド，中国への輸出組合 Comptoir d′ exportation des verres á vitres と窓ガラスの連合会 Association des maîtres de verreries belge の如き強力な組織が作られていた。[13)]

以上概観して来た通り，第一次大戦前のベルギーにおいては，外国市場に依存しつつ生産の集積を行い，自らも外国に多数の企業を支配する，鉄鋼，

亜鉛，ソーダ，ガラス等の巨大な独占体が形成されたが，他方国内市場に依存する。消費財を生産部門では，その市場の狭隘さの故に，集積・集中が進まず，中小企業が支配的な分野となった。こうした，独占形成に対応する銀行資本の再編を次に分析して見よう。[14) 15)]

§2　銀　行　資　本[16)]

ベルギー銀行没落と相前後して，個人銀行やフランス，ドイツ資本の手で幾つかの重要な銀行が誕生し，そのあるものは投資銀行として急速に成長を遂げつつあったが，この時期のソシエテ・ジェネラルの優位は圧倒的で，その系列行も合せると，全国67銀行の自己資金や債務の1/3を占めるに至った。一方，ベルギーにおいては，国立銀行の寛大な手形再割引政策のため，群小の地方中小銀行が淘汰されずに残り，都市銀行による吸収が遅れていたが，ソシエテ・ジェネラルは，大不況以降，新設や参与によって18行を系列下に置いた。そして，外国でも，フランスの個人銀行と共同でパリ合同銀行

第34表　第一次大戦前のベルギー主要銀行

（1913年12月31日現在，金額百万フラン単位）

銀　行　名	払込資本金	積立金	債　務	計
1. Société Gérérale	39	67	382	488
2. Caisse Générale de Reports et de Dépôts	20	20	382	422
3. Banque Belge pour l′ Etranger	30	1	134	165
4. Banque d′ Anversois	25	20	112	157
5. Crédit Général Liégeois	30	10	109	149
6. Crédit Anversois	26	6	107	139
7. Banque Centr. Anversois	18	9	83	110
8. Banque Générale Belge	9	3	92	104
9. Banque Intern. de Bruxelles	30	15	56	101
10. Banque de Bruxelles	25	2	73	100
11. Banque d′ Outremer	34	10	55	99

Chlepner, *Marché Fiancier*. p.97

Banque de l' Union Parisienne (1904年)[17]を，又，イタリア資本の参加によって，ブラジルでの金融活動の便宜を計るべくイタリー＝ベルギー銀行を（1911年），中国では，ベルギー外国銀行，（旧中国＝ベルギー銀行，1913年）をそれぞれ設立又は支配した。

さて，この時期のソシエテ・ジェネラルの経営を貸借対照表や損益計算を参照しながら検討してみよう。まず，借方では商業手形に比して，株式，交互計算信用の増大が著しい。然し，第37表が示す通り，その株式の40%は銀行株によって占められている点に注意せねばならない。しかも，その系列下の地方銀行は，所在地毎に特色を持っているとはいっても，その業務は一交

第35表　ソシエテ・ジェネラル貸借対照表

	1875	1880	1889	1900	1913
借方					
現金	5	3	5	6	12
商業手形	35	20	32	48	63
系列銀行債務	2	3	3	3	5
当座貸越	27	57	38	58	108
担保貸付	2	3	1	5	15
公債	19	22	17	13	58
社債	1	—	10	4	19
株式	90	81	97	116	186
出資	—	—	—	11	22
不動産	1	1	1	2	2
貸方					
資本金	32.8	32.8	32.8	32.8	32.8
積立金	46	48	54	56	66
貯蓄金庫預金	14	15	16	22	37
社債	37	38	39	36	57
預金	29	17	27	47	142
当座借越	14	35	36	70	146
損益	7	4	2	6	10
計	180	191	206	267	490
株式預託	33	52	118	330	1,405

Chlepner, *Marché Financier*, p.98

第36表—Ⅰ　ソシエテ・ジェネラル系列地方銀行

単位：百万フラン　年次は，ソシエテジェネラルの参与開始年

銀行名	年次	資本金積立金	債務
1. Banque d′ Anvers	1823	45	112
2. Banque de Hainaut	1872	4.5	6.8
3. Banque Centrale de Sambre	1872	3.1	4.6
4. Banque de Verviers	1873	2.5	4.5
5. Banque Centrale de Limbourg	1873	0.4	0.9
6. Banque de Courtrai	1873	1.5	2.7
7. Banque Centrale de Namur	1874	1.0	2.1
8. Banque Centrale de la Dyle	1881	1.0	2.7
9. Banque de Gand	1881	10	53
10. Banque de la Flandre Occidentale	1881	3	8
11. Banque Centrale Tournaisienne	1881	2	7
12. Banque Générale de Liége	1882	10	54
13. Banque Générale de Centre	1903	6	19
14. Banque de Rouler-Thielt	1906	2.5	15
15. Banque Centrale de Meuse	1907	2	6
16. Banque de Huy	1909	?	?
17. Banque Centrale de la Dendre	1910	2.6	16
18. Banque Générale d′ Ostende	1913	?	?

Chlepner, *Maiché Financier* pp.63, 100-105.

第36表—Ⅱ　ソシエテ・ジェネラル系銀行の比重　（百万フラン）

	資本金・積立金	債務
ソシエテ・ジェネラル	106	382
系列地方銀行（18行）	85.1	309.3
特殊銀行＊（3行）	64	422
小計	255.1	1,113.3
全国総計（67行）	731	3,009
比率（%）	34.9	37.0

＊ Banque Belge pour l′ Etranger, Banque, Brésilienne Italo-Belge, Banque de l′ Union Anversois (Credit Foncier de Belgique. は，不詳) Chlepner. *Marché Financier* pp.63, 94, 100—105. より作成，地方銀行についての数字中，2～7は，1875年末のもの

第37表　ソシエテ・ジェネラル保有様式　（1913年12月31日現在）

	帳簿価格（フラン）	比率（%）
鉄道	37,673,862	20
石炭	28,339,700	15
金属	24,969,000	14
電気	1,579,800	1
銀行	74,932,250	40
其の他	18,737,050	10
総計	186,231,662	100

Van der Valk. *t.a.p* blz. 45, Aantekening 2

＊額面価格と市場価格の中間値

第38表　ソシエテ・ジェネラル保有株式配当率　(%)

	1886	1887	1888	1889
石炭	1.95	1.68	2.13	2.22
鉄道	1.50	2.69	2.79	1.54
金属	0.36	0.40	2.00	2.18
銀行	6.11	5.95	6.59	6.08
其の他	2.40	1.17	1.88	1.89
平均	2.36	2.74	3.10	2.77

F. Baudhuin, *Le Capital de la Belgique et le Rendement de son Industrie avant la guerre*. Louvain, 1924 p.101

第39表　主要部門別対投下資本収益率

年度＼部門	石炭	金属	市街鉄道	銀行	植民地	電気・ガス
1894	3.0	5.1	1.5	7.1	—	—
1895	1.4	5.0	4.6	8.2	—	—
1896	2.4	10.2	4.3	7.8	—	—
1897	6.7	7.5	4.7	8.0	—	—
1898	6.2	5.6	4.4	9.2	—	—
1899	8.0	5.3	4.7	8.3	—	—
1900	12.3	4.6	6.1	7.3	—	—
1901	11.3	0.4	3.0	− 1.6	1.6	0.5
1902	4.9	− 4.6	0.1	5.4	3.6	− 0.7
1903	3.7	− 7.0	3.7	0.9	1.3	− 1.1
1904	− 0.7	− 7.6	2.6	6.1	− 1.6	− 8.9
1905	− 1.1	1.1	3.2	5.1	4.7	− 8.2
1906	7.1	− 5.5	5.3	7.1	6.0	−11.2
1907	7.5	0.6	2.8	8.4	− 2.7	3.1
1908	7.9	2.7	2.9	7.9	1.6	4.4
1909	6.7	2.9	5.3	8.3	2.0	− 0.4
1910	3.2	4.1	4.3	8.8	6.1	6.2
1911	3.5	4.3	6.0	8.3	4.4	7.7
1912	5.5	1.1	4.1	8.5	5.2	7.4
1913	0.5	6.6	5.7	8.3	3.7	7.0
1901—13平均	4.5	0.2	4.1	6.6	2.8	1.0

Baudhuin, *op.cit* Tableaux-Annexes V—XⅦによる。

互計算信用による多少の貸越を別にすれば—短期信用を主としていたし，又，ソシエテ・ジェネラルの交互計算信用の中には，対銀行の勘定も含まれていた。そして，大不況以降，銀行株は，他の諸産業に比して遙かに安定した高い配当をもたらしたのである。従って，全体として，この時期のソシエテ・ジェネラルの収益の最も重要な部門が正規の銀行業務から得られていたことは，十分に推測できよう。その他の重要な参与部門は，鉄道，金属，石炭であるが，（第37表），石炭産業の収益は，前に述べたよ悪化しつつあった。製鉄業においても，ソシエテ・ジェネラルは，ロシア＝ベルギー製鉄を除いて，大企業を支配していなかった。鉄道では，80年までは遠距離鉄道に，80年以降は，市街鉄道（北フランス，ブリュッセル，オデッサ）に出資してお

第40表　ソシエテ・ジェネラル収益　（1,000フラン）

	1860年	1913年
収益		
株式配当	5,272	12,129
社債利子	417	769
公債利子	215	2,270
当座貸越	600	2,307
割引	—	2,603
為替取引	611	1,215
証券担保貸付	—	267
売買金	691	638
雑	30	—
− 経費	− 2,235	−12,628
純益	5,637	10,403

Le Centenaire de la Société Générale de Belgique 1822—1922, p.156

り，90年以降もメキシコやスペインの鉄道に参与しているとはいえ，20世紀に入ってからは積極的な進出は見られなくなった。一方，コンゴ植民地については，ソシエテ・ジェネラルは，海外銀行 Banque d′ Outremer の設立に加り，多くの企業の株式発行を引受けたが，コンゴの開発は軌道に乗っておらず，ソシエテ・ジェネラル自身，そのパイオニアの役割は他に譲っていた。

このように，ソシエテ・ジェネラルは，巨額の内部留保と預金を擁していたにも拘らず，この時期には，参与については著しく消極的であり，地方銀行をも含めた支店網強化により，正規の金融業務に力点を移し，又，外国債の発行に主たる関心があった。かくて，ソシエテ・ジェネラルは，トマス法導入による製鉄企業の集積・集中の過程で，かえって，大独占体との関係を弱め，電気・化学，電鉄あるいは植民地産業についても，これを新興財閥あるいは企業会社 trust financier の手に委ねた。

さて，ソシエテ・ジェネラル系以外の銀行の中で，最大の資金量を誇っていたのが**ルポール＝預金金庫** Caisse de Report et des Dépôts である

が，これは，その名称の通り株式担保金融を業務とし，商業銀行ないし信用銀行ではなかったので差当り考察の対象外に置こう。これに次ぐものが**リエージュ信用銀行** Crédit Général Liégeois で，1865年に株式合資銀行(A. F. Poult & Cie. 旧 J. Fraipont et Cie.) として設立され，85年株式銀行に改組された。同行は，その所在地リエージュを中心に内外の多数の企業 (Cie. Générale de Conduit d′ eau 及びその在外企業，Cotonnière d′ St. Étienne, Cotonnière de Rouvray ベルギー，ルクセンブルクの製鉄企

第41表　ブリュッセル銀行及リエージュ信用銀行

主要資産・負債項目 (1913)

借方	B.B.	C.G.L
	百万フラン	
商業手形	22.4	33.4
当座貸越	5.3	51.9
貸付，ルポール	22.9	8.8
銀行コルレス	20.1	
株式	20.6	32.4
社債		6.5
出資	7.9	4.9
不動産	1.3	5.3
貸方		
資本金	30	30
積立金	15.1	10.2
社債	—	12.3
当座借越	55.5	86
定期預金	—	8.1

B.B.=Banque de Bruxelles　　Chlepner, *op.cit.* pp.98—99
C.GL.=Crédit Général Liégeois.

業等々）の株式を取得したが，そのうちの幾つかによって損失を蒙った。その後，1900年の恐慌で流動性の喪失によって経営困難に陥ったが，その危機を乗切ることが出来た。そして，この後，商業手形割引，交互計算信用業務の比重を高めた。

アントウェルペン信用銀行 Crédit Anversois は1898年，1,200万フランの資本金をもって設立され，主要な出資者は，ブリュッセル商業金庫 Caisse Commerciale de Bruxelles，リエージュ信用銀行，パリ割引銀行 Comptoir d' Escompte de Paris であった。この銀行も種々の企業に参与したが，1900—1年の恐慌による株式の減価で損失を蒙り，960万フランに減資し，爾後短期信用供与にその業務を限定し，銀行以外の外部の企業への参与を一切避けた。1905年，ドイツの商工銀行 Bank für Handel und Industrie の代理店となったが，1911年の3,000万フランへの増資に当って，クレディ・モビリエが重要な出資者となった。大戦直前，地方都市に代理店及び系列銀行（Société Belge de Banque, Crédit Tirlemontois, Crédit Limbourgeois, Banque Auxiliaire de le Bourse）を設置した。

アントウェルペン中央銀行 Banque Centrale Anversoise. は，1871年，アントウェルペンの個人銀行グループ，クレリンガー H. Krelinger，レンメ，L.C. Lemmé，グリザール F. Grisar と，ケルンを中心とするドイツ系の銀行によって設立（資本金6,000万中3,000万払込）され，1875～6年恐慌で600万フラン以上の損失を蒙ったため，ドイツ側は解散を主張したが折合いがつかず撤退して，同行は減資を行なった。同行は，手形割引を主とする商業銀行の性格を維持していた。

ベルギー全国銀行 Banque Générale Belge も，19世紀末の産業発展の中で種々の工業に参与したが，その後の不況で，手持ちの証券が暴落し，積立金の取崩しでこれを償却することが出来た。以後，短期の信用業務に跼蹐しているが，依然，幾つかの産業部門に，重要な参与を残している。

ブリュッセル銀行 Banque de Bruxelles は，1871年，資本金5,000万（払込2,500万）を以って設立された。出資者は，エレラ＝オッペンハイム，J. Errera-Oppenheim，ドウロワ＝ティベルギアン C. Delloye-Tiberghien et Cie. (la Caisse Commerciale) 等の個人銀行とフランクフルトの資本で，ルクセンブルク国民銀行 Banque Nationale de Luxembourg，ダールブッシュ炭坑 Dahlubsch 全国市街鉄道会社 Société Générale de Tram-

way ペルー硝石鉄道 Chemin de fer de Saltpêtre du Perou の主要出資者となった。しかし76年の不況で無配に陥りドイツ側の要求で，その出資を買取り，1875万フランに減資した。その後暫らく停滞を続け，ルボール，割引，国債，地方債発行等の金融業務に力点を移した。1880年，後に述べる Société Générale de chemin de fer économique (一般軽便鉄道会社)等の，95年には，全ベルギー電気事業会社 Société Générale Belge d' entreprises électriques の設立に加っている。大戦直前の14年4月，4,000万フランに増資した際，石炭資本コペー財閥 Coppée が新株の半ばを株式・社債で現物出資し，以後，同行は，この産業コンツェルンと癒着して行った。

ブリュッセル国際銀行 Banque Internationale de Bruxelles. は1898年，アントウェルペン中央銀行とドイツ，オーストリア，スイス，オランダ資本の合弁によって設立され，個人銀行 Franck-Model を吸収した。ロシア，スペイン，イタリアの諸企業へ参与したが，続く恐慌で証券が暴落し損失を蒙った。然し，次期にはこの損失を補填することが出来た。1907年よりフランス資本も参加し，重役会に代表1名を送っているが，全体としてドイツ系が優勢で，ブリッセルにおけるドイツの利益を代表するものと考えられていた。

海外銀行 Banque d' Ontremer. は，1899年，ソシエテ・ジェネラルを筆頭とするベルギーの諸銀行，パリ＝オランダ銀行他2行のフランス系，ドイツ系2行によって，3,250万フランランの資本金をもって設立され，世界各地の各種企業に参与したが，1900—1年恐慌で2,500万フランの減資を余儀なくされ，手持の証券の一部を売却した。その後海外への投資のテンポは鈍ったとはいえ，コンゴの諸企業をはじめ，中国の開平炭坑，ベルギー＝カナダ製紙 Belgo-Canadian Pulp and Paper，オランダのラウラ＝フレーナッヒング炭坑 Laura-en-Vereeniging を支配している。1910年，東洋国際会社Cie. Internationale d' Orient の吸収で4,000万フランに増資した。

§3　ベルギー資本の海外進出

大不況をもって，クレディ・モビリエやロートシルト系の投資銀行によるヨーロッパ大陸の長距離鉄道の建設は終りを告げ，ベルギーは，新たな商品

•資本市場を開拓しなければならなかった。

先ず,1890年恐慌までの間，ベルギーの資本輸出の対象は，鉄道,殊に，遠距離鉄道に代る市街鉄道や近郊鉄道にあった。ソシエテ•ジェネラルは,その子会社「ベルギー鉄道会社」を通じて，1877年～83年にかけて,ドイツ,オーストリア,フランスで,幾つかの路線（Hamburg-Kuxhaven,Neu-Strelitz-Warnemünde. Warnemünde-Falster 連絡航路，ベルリーン＝南ドイツ新線，ヴィーン＝アスパング Aspang,グラーツ＝ケフラッハ Graz-Köflach，リオン＝サン•ジェニ•ダオスト Lyon-St.Génix d′ Aoste）の認可を獲得し，又，82年，イタリア資本と共同で設立した「ベルギー＝イタリア鉄道会社」Cie. belge-Italien は，アペニン中央，ナポリ，北ミラノ，テッシーナTessina 等の鉄道を建設，支配した。[18]

又，ソシエテ•ジェネラルは，ベルギー鉄道補助会社 Cie. Auxiliaire Belge de Chemin de fer に84年参与し，同社は，その外国事業のため，86年，国際鉄道補助会社 Cie. internationale auxliaire des chemins de fer を設立した。[19] このように，ソシエテ•ジェネラルが，正規の鉄道に主力を注いでいる間,他のグループは,市街＝近郊鉄道に進出した。例えば1874年，ブリュッセル銀行，エレラ，ベルギー商工銀行 Banque Belge de commerce et de l′ industrie によって「一般街鉄会社」Société Génerale de Tramway が設立され，トリエステ，ナポリ，バルメン—エルバーフェルト，レンベルク Lemberg の街鉄を経営した。又83年，リエージュ銀行，リエージュ信用銀行は，Société d′ entreprise Générale de Travaux（旧フィリッパール系79年設立）を支配し,ブレシア Brescia—マントヴァ Mantova，ローマ，ボロニアの街鉄＝近郊路線を獲得した。又，1880年，ブリュッセル銀行，ブリュッグマン＝カッセル,パリ＝オランダ銀行の手で,一般軌道会社 Société Générale des Chemins de fer économique（後<Economique>）が設立され Cie. Génerale des Tramways を合併し，新たにミラノ—ベルガモ Bergamo—クレモナ Crenona 線，フィレンツェ市街鉄道の認可を得た。又1880年に，アントウェルペン中央銀行，フィリップソン＝ホルヴ

ィッツ Phillipson-Horwitz, とドイツ系グループの設立した「一般補助鉄道会社」Cie. Générale des Chemins de fer secondaire は，イタリア，オーストリア，ドイツに路線を確保した他，持株会社「ハンガリー鉄道銀行」Banque Hongrois des Chemins de fer に参与した。更に，1880年に，ベルギー・ヴァランシアンヌ街鉄＝鉄道会社 Société Belge des Tra-mways et Chemins de fer de Valencienne (83年，フランス・ノール軌道会社Société fançaise des chemins de fer économiqne du Nord) が設立されたが，これは，アンパン Ed. Empain の国外進出の端緒で，81年には続いて「狭軌鉄道会社」Cie. des Railways á voie étroite が設立され，ヴァランシアンヌ附近の多数の路線を獲得した。[19]一方，ソシエテ・ジェネラルも，「フランス地方鉄道会社」Société fançaise des chemins de fer dé-partemevtaux を設立し，アンドゥルーロワール Indre-Loire，ラ・マンシュ，La Manche，コルシカ Corse. の諸県，アルジェリア等に路線を敷設した。

こうして，ベルギー資本の経営する鉄道はヨーロッパ内に30ケ所で，この中にはミュンヘン，デュッセルドルフの街鉄，ロシアの三つの街鉄，鉄道（オデッサ），ハルコフ，北ドネツ）が含まれていた。[20]

然し，電化以前のこれらの鉄道の収益は芳しいものではなく，現地の様々の反発を蒙らねばならなかった。そして84年恐慌以降，沈滞期に入り，88年までの間に，僅かに，スペイン—マドリッド街鉄 Tramway de Madrid et l′ Espagne (85年)，パリ—バレッタ Bari-Barletta (86年) の二つの新設を見たのみであった。

続く88年—90年にかけては，ベルギーの資本輸出の関心は，南米（ブラジル，アルゼンチン）に向けられた。しかし，この地域への資本輸出はイギリスの独壇場であり（鉄道資本の75.9%），わずかに，ブラジル南西鉄道会社 Cie. des chemins de fer Sud-Ouest Brésiliens (1890年，フィリップソン系)，南米大中央鉄道会社 Cie.de Chemin de fer Grand Central Sud-Américain (89年，アンパン—オトレ Otlet 系) リオ・ガス，Gaz de Rio,

カラスカ水道 Eaux de Caracas が設立されたに止まり，その他には，ブリュッセル銀行，アントウェルペン中央銀行，パリ＝オランダ銀行，フランク＝モーデル，フィリップソン，マテュー Mathieu の手で，国債，株式社債がベルギー証券市場に送り込まれたのみであった。然し，ベルギーの引受は極く一部に止まり，1890年のアルゼンチンの支払停止と，それに続くベアリング Baring 商会の破産は大きな被害を及ぼさなかった。[21]猶，既に，こ時期からコンゴへの進出が開始され，「コンゴ通商産業会社」Compagnie du Congo pour le commerce et l' industrie, (87年)，「コンゴ鉄道」Cie. belge du Chemin de fer du Congo. (88年)「カタンガ会社」Cie. du Katanga (91年) の三つの特許会社が設立されている。

こうして，ベルギーの資本輸出は，91年の恐慌後，沈滞を続け，95年再出発するが，既に，この時期で輸出総額は10～20億フランに達していた。

さて，1895～6年から，ベルギーの資本輸出に新しい局面が開かれた。それは，新たに電気産業が鉄道に代り資本進出の立役者として登場し，又，帝政ロシアの殖産興業政策に乗じて，ベルギー資本のロシアへの大行進が始まったことである。以下地域別に，その実態を明らかにして置こう。

ロシア ベルギー資本の尖兵となったのはリエージュの重工業企業コックル社で，既に1864年，同社はペテルスブルクのグトゥリエフスキー Goutouriefsky 島に，小型砲艦を組立てる造船所を設立しており，ロシア市場には深い関心を払っていた。然し，当時，コックリル社は専ら商品輸出に関心を寄せ，組立後，この造船所を乾ドック共，テニシエフ公 Prince Tenischiev（ブリヤンスク Briansk 会社の創立者）に売却してしまった。然し，77年ロシアが高関税によって外国鉄の締出を企てた結果，同社のロシアにおける売上は，77年の500万フランから86年の30万フランまで激減した。この損失を取戻すための同社は，ベルギー本工場を模した。ニコライエフ造船所 Chantier Navale de Nicolaiev とクリヴォイログの製鉄所を連らねる大製鉄＝造船企業を設立せんと試みた。然し，この黒海岸唯一の造船所を外国資本の手に委ねることについては，ロシア海軍や製鉄業者の激しい抵抗

を受け，コックリル社は，結局ロシア内の企業と合弁形式を採ることを余儀なくされた。この相手に選ばれたのが「ワルシャワ製鋼」で，両者の折半出資で資本金500万ルーブル（1,330万フラン）の南ロシア＝ドニエプル製鉄会社が，クリヴォイログに設立され，設備（300万フラン）は，コックリル社によって製作された。同社は，89年に操業を開始したが，高品位のベッセマー銑用鉄鉱石や良質のコークス炭に恵まれ，その最新式設備のお蔭で，莫大な特別利潤を獲得し，93—4年に20%，96年～1900年には40%の高配当をを続けた。[22]この成功に刺戟されて，ベルギーの製鉄企業は先を争って，ロシアに進出した。95年には，ソシエテ・ジェネラルが，アングレール製鉄，サン・レオナール製鋼と共にロシア＝ベルギー製鉄 Société Métallurgique Ru-

第42表—I　在ソヴィエット・ロシヤ地域旧ベルギー資産（1914年現在）

企業

分類		会社数	資産（百万金フラン）
I 金属・鉱山	金属工業	13	965
	石炭	13	100
	コークス	3	57
	鉱山	8	39
	小計	37	1,160
II 其の他の鉱工業	機械	16	142
	石油	3	113
	化学	4	107
	繊維	7	73
	ガラス	4	68
	セメント・陶器	11	38
	雑	36	67
	小計	81	608
III 公益事業（運輸・ガス・電気）		43	582
総計		161	2,350

公債

種類	金額（百万金フラン）
国債	385
鉄道債	103
都市債	37
其の他	115
計	640

預金

種類	金額（百万金フラン）
銀行預金（機関）	193
同（個人）	87
商業上の債権	125
計	405

企業	23.50	億金フラン
公債	6.40	
預金・債権	4.05	
其の他*	1.05	
総計	35.00	

* 保険金・家屋・現金

E. Witmeur, 'Les Avoirs et Intérêts belges en Russe'. *Revue Economique Internationale* Mai 1922

第42表—II ロシヤにおけるベルギー系製鉄企業生産高（1899年）

会社名	株式資本金（万フラン）	銑鉄（千トン）	鋼鉄（千トン）
南ロシア・ドニエプル	1,325	186	170
ロシア・ベルギー	2,637	153	113
タガンログ	1,982	67	66
プロッィダンス*	665	42	?
トウーラ	742	90	—

日南田静真、前掲書 184頁

＊は和田春樹 前掲論文㈡143頁 中山弘正、前掲論文 164頁

sso-Belge（800万ルーブル）と云う。南ロシア＝ドニエルに匹敵する巨大企業を設立し，続いて，エスペランスも，トゥーラ製鉄を，96年，ウーグレがタガンログ製鉄 Société Métallurgique de Taganrog を，マリエ炭鉱は，オルコヴァイア製鉄 S. A. des Hauts Fourneux et Usines Olkovaia á Oupensk を，97年，プロヴィダンス社がケルチュにロシア・プロヴィダンス社 Providence Russe を設立し，又，コックリルも95年，ニコライエフに宿願の造船＝機械会社 Société des Chantiers, Ateliers et Fonderies de Nicolaiev を設立した。このような製鉄企業の成功と，金本位導入による通貨の安定は，一層ベルギー資本の進出を促し，化学，ガラス，街鉄，石炭等でも続々ベルギー系企業が設立された。そして，1901年まで，実に130社，1億3,100万フランで，ロシアにおける外国企業資本金の⅓を占めるに至った。然し，続く1900～1年恐慌は，まだ基礎の固らぬ在ロシア企業に大きな打撃を与え，その株式価格は60%近く暴落し，プロヴィダンスとニコライエフ造船は3,000万フラン，エスペランス（トゥーラ）は1,250万フラン，ビエライア製鉄 Hauts-Fourneaux de Bielaia は1,000万の損失を蒙った。そして，続く日露戦争と第一次革命のため，一時ベルギー資本の進出は杜絶えたが，その終熄後，電気を中心とする進出が再開された。こうして，1913年，大戦直前には，ベルギー系企業の資本金は23億フランに達し，中でも，南ロシア＝ドニエプル，ロシアベルギーをはじめとする製鉄＝金属資本は，13社（資本9,65金億フラン）で，中でも，南ロシア＝ドニエプルとロシア＝

ベルギーは，ロシア最大企業の一つであり，ベルギー系企業の銑鉄生産は全国の1/3,南ロシアのみで45%を占め，主要企業によって結成された鉄鋼カルテル（プロダメタ Prodameta）における割当額は42%占めていた。この他，ベルギー資本は，ソーダ（ソルヴェー100%），石炭（20%），タール化学製品（75%）板ガラス（50%），其の他のガラス（30%）等で，重要なシェアを握り，石油でも，グロズヌイ油田（Société de Grosnyi）の40%を押えていた。[23)24)]

コンゴ　ベルギーの過剰資本は，熱帯植民地，―フィリッピン，アンゴラ，ポルトガル領ギニア，黄金海岸，カルメーンあるいはエチオピア，ボリビア，メキシコ―にも流出してはいるが，1885年コンゴがベルギーの掌中に帰して以来，ここが，ベルギー植民地企業の中心舞台となり,殊に98年,カタンガで銅鉱床が発見されて以来,これがゴム,象牙等の農産物に代って，最大の輸出品と化した。このコンゴ開発の企業会社に対する発起業務の担当者となったのは，1896年に設立された海外銀行とソシエテ・ジェネラルであった。投資は,まず鉄道に始り,89年にパイオニアのティース大佐 Colonel Ed. Thys の手で，「コンゴ鉄道会社」Cie. de chemin de fer du Congo(マタディ=レオポルドヴィル Matadi-Léopoldville, 98年スタンリー・プール Stanley-Pool への延長開始）が設立され,1902年には,「カタンガ鉄道会社」Cie.de chemin de fer du Bas Congo au Katnga が設立された。この会社は，カタンガのローデシアとの国境からカンボーヴ Kambove までの439キロの鉄道建設と，沿線の探鉱を目的としその資本金200万フランの¾をソシエテ・ジェネラルが引受けた。更に1906年に,ベルギー側の「カタンガ特別委員会」Katanga Special Committee と，イギリス系「タンガニーカ鉱山会社」Tanganyka Concession Ltd. の手で，「上カタンガ鉱業連合」(ユニオン・ミニエール)Union Minière du Haut-Katanga(資本金 1,000万フラン,ソシエテ・ジェネラルと,タンガニーカ鉱山がそれぞれ半額を引受)が設立され，銅をはじめとするこの地方の鉱業権を獲得した。そして1910年，ローデシア側からの鉄道延長により，ローデシアのウォンキー炭田 Wankie

Colliery Co. 及び，モザンビックの海港と結ばれ，ルブンバシ Lubumbashi (Elisabethville) の精錬所が操業を開始し，大戦直前には，漸く年産7,400トン台に達した。又，同じく1906年に，アメリカ系資本がソシエテ・ジェネラルの後援によって「コンゴ国際鉱業＝林業会社」(フォルミニエール) Cie. Internationale Forestière et Minière du Congo. (*Forminière*)(資本金300万，12年800万に増資) が設立された。この会社は，金鉱の探鉱やゴム等の林業開発を目的とし，各地に，専門の会社を設立した。[24)]

コンゴへの支出の総計は，行政費をも含め8億フランといわれ，うち企業への投資は1913年迄，鉄道に2.31億，其の他の事業に1.84億といわれている。1901年以降13年までのコンゴからの配当は，1.34億に上るがその半ばが，コンゴ鉄道によっていた。[25)]

中　　国　ベルギーはここにも，フランス，ロシアと提携して行った。その最大の成果は，1896年に始まる京漢鉄道，1,300キロの建設である。コックリル社は，ロシアに代る市場として中国に関心を寄せ，1883年，ソシエテ・ジェネラルの支援の下に中国や日本に使節団を派遣しており，この年，再度の北京派遣の結果1,125億フランの国債引受けにより，ベルギー・フランス資本のシンディケート，「中国鉄道調査会社」Société d' Etude de Chemin de fet en Chine（ソシエテ・ジェネラルの子会社 Soc. Belge de Chemin de fer，パリ・オランダ銀行，クイエ，コックリル，ミューズ製鉄）がその建設を委ねられ，義和団事件で遅延しつつも1905年完成した。そして，この建設は，両製鉄に莫大な鉄道資材の輸出を保証した。

この他，アンパン系の「中国鉄道会社」Cie. Générale de Chemin de Fer en Chine（1900年）は1912年，フランスと共同で隴海鉄道1,800キロの路線敷設権を獲得し，又1908年設立の「ベルギー中国鉄道会社」Société Belge de Chemin de Fer en Chine も2,000キロ以上の路線をフランスと共同で建設した。

さらに，1902年設立された「中国＝ベルギー銀行」Banque Sino-Belge（華比銀行）は，商業金融，不動産抵当，公債引受＝発行を主たる業務とし，

1910年ソシエテ・ジェネラルの子会社となり，「ベルギー外国銀行」Banque Belge pour l' Etranger と改称した。一方，海外銀行の子会社「東洋国際会社」Cie. Internationale d' Orient は，開平炭鉱会社，天津市電を支配し，又，イギリス系の上海，香港市電，上海鉄道（南京—上海）にも出資していた。ベルギーの対中国資本輸出は，合弁企業の参加を含め，1931年現在8,900万ドルと推定される。

エジプト　アンパンによって1895～6年より進出が開始され，95年，カイロ市電 Société des Tramways du Caire. 96年「下エジプト鉄道」Société des Chemins de Fer de la Basse Egypte,「カイロ公益事業会社」Société de Travaux publics de Caire. が，1906年には有名な「カイロ電鉄＝ヘリオポリス・オアシス会社」Cairo Electric Railway & Heliopolis Oasis Co. が設立された。一方，ティース等のアントンウェルペンの資本家は，現地資本と協同で，97年「エジプト農工会社」Société Agricole et Industrielle d' Egypte.「エジプト不動産抵当金庫」Caisse Hypothécaire d' Egypte,「ナイル農業」l' Agricole du Nil,「エジプト不動産」l' Immobilière d' Egypte, を，98年に「アレキサンドリア市電会社」Socéité des Tramways d' Alexandrie. を設立した。この他，ベルギー資本は外国資本の銀行（Agricultural Bank of Egypt）や，セメント，精糖，醸造業にも出資している。

ラテン・アメリカ　ベアリング事件で一時下火となったヨーロッパ資本の進出は，利子率低下に伴って90年代再開されたが，ベルギー資本は，アントウェルペン系を中心とする不動産抵当が中心であった。
(Compagnie Industrielle et Pastorale Sud-Americaine, 94年，Banque Belge de Prêt Foncière 99年，ロオ・デ・ジャネイロに支店。Le Crédit Foncier Sud-Americain 1911。又，ブリュッセル系は Société hypothécaire Belge-Americaine. 98年，Compagnie Agricole et Hypothécaire Argentine. 1905年)

不動産抵当以外では，「チリ硝石」（Cie. Générale de Nitrates アンパ

ン），及び「ブエノス・アイレス市電」Cie. Générale des Tramways de Buenos Aires（ソシエテ・ジェネラル・ブリュッセル銀行及び他の企業会社，ソフィナ，ゲスフュレル出資）を持株支配会社とする電鉄事業があり，更に，多数の電気事業にベルギー資本が参加していた。又ベルギー資本はカナダ系の Brazil Railway, Brazilian Traction, Argentine Railway, あるいは，農園，精糖，醸造業にも参与を行っていた。

この他，ベルギーはガリチア（オーストリア領内），ルーマニアの油田，蘭領東インドのゴム，カナダの不動産抵当，製紙に出資していた。[27]

さて，95年以降の電気・電鉄を主軸とするベルギーの資本輸出の中心的担い手は，企業会社 Finanzierungsgesellschaft, *Trust financier* で，ソシエテ・ジェネラル等の大銀行は，企業会社に部分的出資を行ったに過ぎなかった。以下，その主要なものを拾ってみよう。この分野においては，ベルギー技術的に立遅れていたため，ドイツ系電機会社の影響力が目立つ。

A Société Générale Belge d′ Entreprises Electriques 1895年，Gesfürel（Gesellschaft für Elektrische Unternehmung. Löwe-A.E.G. 系企業会社）と，Économique，ブリュッセル銀行，パリ割引銀行 Comptoire d′ Escompte de Paris によって設立され（資本金600万フラン後，何度か増資），ベルギーのみならず，ロシア，スペイン，イタリアで多数の電気電鉄会社を設立した。

B ソフィナ Sofina（Société Financière de Transport et d′ Entreprise industrielles 資本金1,000万フラン）98年，Gesfürel，ドレスデン銀行，リエージュ銀行によって設立され，アルゼンチン，トルコ，スペイン，ポルトガルの多数の電気，市電会社を設立した。1901年恐慌で苦境に陥ったが，有能な経営者ハイネマン（Dannie Heinemann，ドイツ系アメリカ人）のお蔭で危機を乗切り，ベルギーのこの種の会社で最有力となることが出来た。

C アンパン系，幾つかの企業会社があるが，中でも，Cie. russo-française de Chemins de Fer et de Tramways（1896年）は，パリ地下鉄，北パリ市電 Tramway Électrique Nord Parisinne. パリ電力 Electricité de Paris. カルヴァス鉄道，Chemin de Fer du Calvados，アストラカン，タシュケントの市電等，フランス，ロシアの多数の企業を設立し，1904年，同じくアンパン系の Cie. Générale de Railways et Électricité と合併した。又，アンパンは，1889年（Économique）と共同で，Société Générale de Tramways Électriques en Espa-

gneを設立した。

D **Mutuelle des Tramways**（資本金100万）ベルギーの電力会社グループにより95年設立，ロシア，イタリア，バルカン諸国の多数の企業に参与し，又，建築業をも業務とした。1900—1年恐慌で損失を出したが，後これを償却して順調に発展した。大戦直前，ソシエテ・ジェネラルの支配下に入る。

この他，リエージュ・グループの設立した。la Compagnie de Traction et de l′ Électricité(1897年，1903年 Société Générale des Tramways et d′ Application de l′ éctricité は，南ロシアの多数の都市(セバストポール，エカテリノダル，ヤロスラフ，クレメンチューグ）に市電，発変電所を経営した。一方1898年に，ピーパー Pieper と，リエージュ信用銀行 Crédit Général Liégeois の設立した Société internationale d′ Entreprises et d′ Exploitation も，ロシア，ベルギー，アルジェリアに電力会社を設立したが，その資本金1,000万フランに相当する損失で，1906年，（Centrale Électrique）に吸収された。[28]

1913年におけるベルギーの在外資産の総額は，50～70億といわれ，うち企業への出資は21.36億フランと推定される。この額はベルギー国内商工業企業の資本金（24.65億）を稍下廻るに過ぎない。そしてベルギーの絶えざる資本輸出によって，その為替相場は絶えず8％程度平価を下廻っていた。[29]

但し，こうしたベルギーの資本輸出は，ベルギー国内の過剰資本＝遊休資金の動員のみによって賄われたわけではない。ベルギーは，一方ではフランス系（時にはロシア，イギリス，ドイツ系）の企業に種々の出資を行なっているが，他方では，ベルギーの在外企業は，ブリュッセルの証券市場を通じて，巨額の外国の資金吸収していたのである。第43表が示すごとく，20世紀に入

第43表　ベルギー株株会社の発行と応募（百万フラン）

年次	国内事業を主とする会社		国外事業を主とする会社	
	ベルギー在住者応募	国外在住者応募	ベルギー在住者応募	国外在住者応募
1890	55.4 (88.1%)	7.5 (11.9%)	42.1 (74.2%)	14.6 (25.8%)
1900	126.5 (83.9)	24.3 (16.1)	120.8 (40.9)	174.3 (59.1)
1910	157.0 (89.4)	18.7 (10.6)	89.1 (53.7)	76.9 (46.3)
1911	183.2 (86.4)	29.0 (13.7)	128.4 (48.8)	134.8 (51.2)
1912	176.6 (84.7)	32.0 (15.3)	97.9 (29.6)	232.6 (70.4)
1913	118.6 (77.8)	33.9 (22.2)	49.5 (35.5)	89.9 (64.5)

F, Baudhuin, *op.cit* p.230

るや，国外の事業を主とする株式会社の発行が急速に増大し，国内事業の発行を圧倒するに至る。そして，国内事業の会社が主としてベルギー内で引受けられているのに対し，国外事業は，その60～70%までが，国外居住者の応募によっている。このように，ベルギーは永世中立国として，有力な資本逃避先，ヨーロッパの遊休資金の一つのプールとなり，一方では，フランス，ロシアの公債発行業務を補い，他方では，外国に主として企業進出の形をとりつつ資本輸出を行なった。

§4　小　　括

以上検討して来た所より明らかなように，ベルギーの産業独占体は，狭隘なベルギー市場の枠を乗越え，ドイツ，フランス，ロシアに資本進出を行う国際的金属・化学企業—コックリル，ウーグレ,プロヴィダンス,ソルヴェー,ヴィエイュ・モンターニュ—あるいは，ソフィナ，アンパン等の国際的電気＝電鉄トラストを中核に形成された。この動きの中で，ソシエテ・ジェネラル等の銀行資本は，部分的に電気トラストに出資したり，ロシアの製鉄に参加してはいるが，もはや，独占形成の中核をなさなかった。そして，巨大な産業独占体との関係も—石炭業や極く一部の製鉄，ガラスを除けば—持株による直接参与はもちろん，交互計算信用による間接的参与においてすら，ドイツの如き強い結びつきは見られなかった。そして，巨大な独占企業は，むしろブリュッセルの証券市場を通して，増資や発起を行うことが出来たのであった。こうして，ソシエテ，ジェネラル等の大銀行は，全体として，通常の，短期の信用業務，あるいは公債発行業務にその力点を移していた。勿論，公債発行業務—殊に鉄道債—は，ベルギー製鉄業のレール，機関車，車輛輸出と密接な関連があったとはいえ，ベルギーの鉄鋼輸出は，何よりもその低価格によって支えられ，ベルギーの公債引受に全面的に依存したわけではなかった。そして，他方，ベルギーの資本進出は，単に関税障壁を乗越えるに止らず，ベルギーの生産手段生産部門に重要な輸出市場を保証したのである。

1) この時期のベルギー製鉄業については，L. Beck, *a.a.O* V. SS. 1116—1141 N. J. G. Pound. and W. N. Parker, *Coal and Steel in Western Europe*. London, 1957. pp.127—139. C. Reuss, E. Koutny et L. Tychon, *Le Progrês Économique en Sidérurgie. Belgique, Luxembourg, Pays-Bas*. Louvain-Paris 1960 passim.

2) 110e *Anniversaire de la Fondation des Usines Cockerill* 1817—1927 による。なおロシア進出については，81頁を参照のと。なお，1905年，カンピーヌ炭田に Société des Charbonnages du Liégeois en Campine を設立（5分の3出資）を設立した。

3) M. Michel, *Contribution á l′ histoire de l′ organisation des entreprises dans la Province de Liége. La Société Anonyme d′ Ougrée-Marihaye des origines* à 1914. Mémoire manuscrit de licence d′ histoire de l′ Université de Liége 1957. pp.92—3, 95, 100, 126. et sv., 130, 139—140.

4) M. Colle-Michel, *Les Archives de la S.A. Métallurgique d′ Espérevce-Longdoz des origines á nos jours*. (Centre Interunivertsitaire d′ histoire contemporaine Cahier 24) Louvain-Paris. 1962. pp.15—19

5) *Centenaire de la S.G.* pp.111—113. Baudhuin, *op.cit.* p.129. ソシエテ・ジェネラルは，フランスの Société Métallurgique d′ Aubrives-Villerupt, Société des Forges de Bellecourt, ルクセンブルクの Société des Hauts-Fourneaux et Forges de Dudelange(Hochofen u. Hüttenwerk Düdelingen. 1911年. ARBED に合同）にも出資し，<Angleur> も，ドイツ（ロートリゲシ）の Deutsch-Oth (Audun-le-Tiche) に高炉を獲得している。しかし，これらは中企業で，ミネット地帯にソシエテ・ジェネラル系のコンツェルンを形成する意図からではなかったのであろう。

6) <Athus>は，リュクサンブール州の，国境近くのミネット鉱地帯に設立され（1872年，S.A. des Hauts Fourneaux d′ Athus 80年製鋼開始，83年トマス法導入),1911年リエージュ近郊のグリヴニェ製鉄を併合した。<Thy-le-Château> は，1846年，漸く高炉を建設し，53年，株式合資会社化して，レール生産で，その後順調に発展したが，大不況下に販路に苦しみ，80年ベッセマー転炉を成設した。88年，S.A. des Hauts-Fourueaux et Usines de Midi de Charleroi と合併し，98年，トマス法に転換した。<Providence> は1838年フランス系資本で株式会社(400万フラン)に改組され，1866年にフランス（ローレヌ）のルオン Rehon に製鉄所を建設，（97年南ロシアのケルチュにロシア・ブロヴィダンス社を設立しているが，その企業史は不明である。<Sambre-et-Moselle> は，1898年，ドイツ系資本（ティッセンか？）が，<Monceau-sur-Sambre> を買収したもので，1908年更に <Phénix works> を，又，フランスの Maiziére-le-Metz に製鉄

所の購入している。なお，<Clabecq>は，1888年，Goffin の圧延所を改造して製鋼所となったもの。Boël は，La Louvière の同族企業である。

7) Burn, *op.cit.* pp.345—6. ベルギーは，ガス・エンジンの導入では，ドイツに先駆け，（コックリル—1895年），1900年には，7,500馬力を使用した。

8) G. De Leener, *L' organisation syndicale des chef des d' industrie. Étude sur syndicats industriels en Belgique*. Bruxelles. 1909. t.I.p. 103 et ss. 1884年の国際鋼鉄レール・カルテル Syndicat International des Rails d' acier に参加したのは，Angleur, Cockerill 両社のみで，7%の割当を受けたが，1904年には18%の割当に増加した。Reuss et al., *op.cit.* p.93.

9) *La Centenaire de S.G.* pp.97—105. *Belgiens Volkswirtschaft* SS.149ff. 南部の石炭会社の資本金は3.1億（112社）うち4,000万がフフランス資本であった。カンピーヌでは，1.6億中5,500万がフランス資本，ドイツ資本は150万フランに過ぎなかった。

10) *Belgiens Volkswirtschaft* SS. 173-4. Cameron, *op.cit.*, pp.353-64. *Centenaire da Société des Mines et Fonderies de Zinc de Vieille-Montagne*. 1837—1937. pp.27—36. A. Marcus, *Die großen Eisen-und Metall-Konzerne*, Leidzig 1932. SS.182ff. *Le Centenaire de la S.G.* pp.114-15. Malou, *op. cit.* Annexe XIX. Société Générale は，1858年にこの株を売却している。

11) R. Lucion, *La grosse industrie chimique en Belgique*, J. Bolle, *Solvay. l' invention, l' homme, l' entreprise industrielle*. 1863—1963.

12) F. Baudhuin, *Histoire économique de la Belgique* 1914—1939. 2e ed. Bruxelles 1946. pp.55—6. A.C.E.C に次ぐのは，重電では，Henri Pieper の Cie. Internationale d' Électricité (1889年) で，この他，電鉄車輌は，コックリル社も製作する。又，軽電では，アントウェルペンのイギリス系のベル社 Bell Telephonが最大である。

13) *Belgiens Volkswirtschaft* SS.167—170. De Leener, *opc it.* t.I.pp. 130～138.

14) この他，重要な大工業としては，車輌＝市電製作と兵器工業がある。前者はコックリルをはじめ40の大企業（7,000人）により，1912年13.1万トン（1.2億フラン）が輸出され，3/5は南米，残りはイギリス，コンゴ，フランス，ルクセンブルク，ルーマニア，オランダに向けられた。兵器工業（軽火器）で最大の企業は，リェージューヘルスタール Hersthal の S.A. Fabrique Nationale des Armes de Guerre で，5分の2はドイツ資本で全部で4,500人の労働者を雇傭し，うち3,000人は兵器部門に充てられた。これに次ぐものは，ドイツ系の Pieper & Cie. で，1,000人を雇傭した。*Belgiens Volkswirtschaft* SS. 184—185.

15) M. Léo Gérard, 'L capacité de production de l' industrie belge considérée par rapport à l' extension de ses débouches' *Revue Economique Int-*

ernationale Août 109.

16) 以下，特に断らぬ場合，Chlepnern, *Marché Financier*, chap, Ⅳ. §5. L′ activité bancaire による。

17) 参加したのは Hottinguer, Heine, Neuflize, Mallet, Verne, Mirabeau, Puerari et Cie である。この他，ヴィーンの Wiener Lombard-u. Escompt-Bank，モロッコ国立銀行，Banque d′ Etat de Maroc，露清銀行 Banque Russo-Chinoise，イギリス＝南米銀行 Anglo-South American Bank，ボルドー銀行 Banque de Bordeaux. この他，ベルギー内の不動産抵当銀行 Crédit Foncier de Belgique にも参与した。

18) *Le Centenaire de la S.G.* pp.123—124. 1886年 Cie Belge-Italien は，本社に吸収され更に1904年 Société Belge du Chemin de Fer が Société Générale に合併された。

19) この会社は，Tubize, Nivelle, Marcienne に鉄道機械工場を所有し，内外に鉄道資材貸与を行なって来た La Métallurgique によって設立された。Chlepner, *op.cit.* p.78.

20) ibid. p.79.

21) ibid. ベアリング事件の背景については，ツガン＝バラノフスキー「英国恐慌史論」163頁，メンデリソン「恐慌の理論と歴史」第4分冊，60—63頁。

22) コックリルのロシヤ進出については cf. J.P. McKay, 'John Cockerill in Southrn Russia, 1885—1905: A Study of Agressive Foreign Entrepreneurship' *Business History Review*. XLI (1967) pp.243—250. 当時ウクライナには，ロシア政府の手厚い保護の下に，イギリス人 John Hughes が 1869年，銑鋼一貫企業「新ロシア製鉄」を設立していた。

コックリルのパートナーとなった。「ワルシャワ製鋼」はドイツ系のレール圧延企業で，86年カーメンスコエにその工場を移し，鉄鉱山の鉱区，炭鉱を取得していた。コックリル社は，出資のうち，16%のみを自社に保有し，残りは危険分散のため重役や株主に移した。なお，コックリル社は，技術指導の報酬として，6%を超える利益の15%を与えられた。さて，コックリル社は，94年，ベルギー定款の「アルマズナイヤ炭鉱会社」Société des Charbonnages d′ Almazaia（資本金600万フラン，うち，コックリル167.5万，南ロシア＝ドニエプル67.5万出資）を，ロシア資本と共同で設立させた。然し，この単純コークス企業は，そのコークスの販路に窮し，マンガン銑鉄生産に乗り出したが鉄鉱石確保のため巨額の投資を行い，そのため，1898年には1,200万に，99年に1,500万フランに増資を余儀なくされた。コックリルは，600万フランを出資した他，450万フランの救済融資を行なったが，この企業は，1900年恐慌で破綻し，コックリルは辛じて貸付を回収したのみで，資本金の90%が失われた。

23) Baudhuin, *Le Capital de la Belgique*, p.129. Witmeur *art.cit*. pp.317-8. なお，主要な公益事業としては，市電街鉄（オデッサ，キエフ，リガ，チフリス，カザン，ロストフ，エカテリノスラフ，ハルコフ，キシネフ，クールスク，オーレル，アストラカン，ウィテブスク，サラトフ，シンフェロポル，ヴラディカフカース，ペテルスブルク，エカテリノダル，セバストポール，ヤロスラフ，クレメンチューク）電力（ペテルスブルク，オデッサ，ビアリストック，カザン）ガス（オデッサ，カザン），電話（オデッサ）等。

24) 帝政ロシアの「工業化」政策—殊に鉄道の役割—については，和田春樹「近代ロシア社会の発展構造—1890年のロシア—」社会科学研究17巻2，3号（1965年）日南田静真，「ロシア農政史論」（御茶の水書房1966年），岡田進<プロダメト>の形成とその構造—ロシア鉄鋼業における独占資本」土地制度史学26号（1965年）中山弘正「帝国主義段階のロシア資本主義」経済志林　34巻4号，35巻1号　1966—67. を参照 。このようなロシアにおける重工業資本は，国家による鉄道建設に深く依存し，しかもそれは外債発行により資金調達を行なった。そのため，1900—1年の恐慌で，鉄道建設が大幅に縮小したことは，これらの重工業資本に大きな損失をもたらした。なお，機械＝造船企業の場合，製鉄より不安定であったことは，1912年清算されたニコライエフ造船の運命が示している。

24) *Le Centenaire de la S.G.* pp.140—9. ソシエテ・ジェネラルは，1913年，ユニオン・ミニエールの株式22,650(100フラン株—時価1,522万)と社債7,000枚(1,000フラン—時価665万フラン）を保有していた 。なお，「コンゴ鉄道」「ユニオン・ミニエール」・「フォルミニエール」の三社は，それぞれ，50年史を発行しているが筆者にはまだ披見の機会がない。

25) Baudhuin, *Le Capital de Belgique*, pp.137—8.この他，ドイツ領植民地のカメルーン（Kamerun-Gesellschaft），及び隣接の Companhia de Pesquizas Mieiras de Angola（Lunda），Intertropical Anglo-Belgian Trading Co. に参与している。Centenaire. p.138. 北村次一「ドイツ植民地会社の役割りと評価」経営史学4巻2号，1969年。

26) ベルギーの投資の計算は著しく困難でフランス・ロシアとの共同投資から，ベルギーの分を計算せねばならない。目下1914年の直接事業の投資額を明らかにした数字は見当らない。レーマー「列国の対支投資」（1933年）721—4頁を参照のこと。

27) Chlepner, *op.cit*. pp.84—5.

28) ibid. p.109.

29) ibid. p.87. Baudhuin, *Le Capital de la Belgique*. p.168. ちなみに1900-1913年にベルギー資本の蒙った損失は11.1億フランで，国内企業が3億，ロシア企業3.6億，其の他が，4.5億であった。なお，ベルギー外国の投資は，12～15億フランといわれ，フランスは，石炭や金融を，ドイツは工業を主とする。

30) 中国における鉄道公債の発行と，鉄道資材の輸入の比率は，第44表をみよ。（中国政府は，中国において当該資材が入手不可能で，かつ，競争国と同一価格の場合のみ，借款国に，その輸入優先権を認めた。なお，この点を扱った。A.P. Winston, 'Does Trade "Follow the Dollar" ?'. *American Economic Review*. XVII (1927). p.463. なお，私鉄の支配的なアルゼンチン，チリー，ブラジル三国についてみると，車輌については，ベルギー輸出の割合は高いが，レール，については，ブラジルでのみ30%を占めていることは，鉄道投資との間の一定の相関関係を示している。

第44表　第一次大戦前における対中国鉄道借款と鉄道資材輸出

国別	借款（万ドル）	輸出 金額（ドル）	輸出 対借款比（%）
アメリカ	300.0	1,184.5	382.82
ドイツ	2,976.1	947.3	31.79
イギリス	5,239.4	689.8	13.16
フランス	2,710.0	65.1	2.40
ベルギー	1,160.0	1,285.1	110.78
計	12,385.5	4,134.9	

Winston. *op.cit* p.472

V　両大戦間における金融資本

戦禍とドイツの占領の間に荒廃し切ったベルギーは，戦後その復興のために巨額の投資を必要としたが，他方，戦後一変した国際環境も，ベルギーに容易ならざる負担を強いた。最大の資本輸出国であった旧ロシア帝国におけるベルギー資産一切が革命によって失われ，更に戦争と金本位体制停止によって，ブリュッセルの国際的資本市場としての地位は永遠に失われてしまった。しかも，戦争で傷手を蒙ったベルギーの重化学工業資本は，戦後の世界市場の中で国際競争に生残るために，巨額の新投資と合理化を迫られた。この過程で，ベルギーの大銀行は，交互計算信用によって産業企業に長期資金を貸付け，更に積極的に増資や社債の発行に当って，自ら引受＝発行業務を担当した。そして，更に進んで持株支配によって，重化学工業や植民地企業の大部分をその支配下に収めるコンツェルンを形成し，資本集中を強力に推

進するに至った。こうして，大恐慌までの間に，ソシエテ・ジェネラルと，戦後銀行集中の過程で急速に抬頭して来たブリュッセル銀行を頂点とする金融寡頭制がほぼ完成し，曽ってベルギーの対外進出の尖兵であった電気・電鉄トラストの殆んどが，いずれかの系列，あるいは共同支配下に組入れられ，独立の産業コンツェルンは，ソルヴェー一社を残すのみとなった。なお，戦後の新しい動きとして，注目される現象として，個人銀行の地位の決定的低下，アントウェルペン系の商業銀行の不振に代って，農業協同組合（農民同盟 Boerenbond)系の金融機関殊に，「全国銀行連合」De Algemeene Bankvereenining と，労働者生活協同組合系の「ベルギー労働銀行」Belgische Bankvan Arbeid が，第一次大戦後，急速に成長し，投資銀行として六大銀行の列に加わったこと。又，戦災復興と輸出振興のため，国立銀行や大銀行の出資で設立された「工業金融公庫」Société Nationale de Crédit á l'industrie が，長期信用供与で重要な役割を担うに至ったことを付加えておこう。

こうした，銀行独占体と産業独占との融合を促進した諸条件として，次のものが挙げられる。(1)，既に戦前からソシエテ・ジェネラルが，他に比肩するものを見ぬ大銀行としての地位を確立し，1830年代からの遺産として，石炭，製鉄業に一定程度の参与を行なっていたこと。しかも，戦前すでに巨額の内部留保を蓄積していたこと。(2)，戦後，国際的資本市場を通じて，株式を発行する途が閉ざされ，専ら国内の遊休資金を動員せざるを得なくなったが，幸に，インフレと農村の繁栄のため，株式の発行は容易であったこと。殊に，インフレの時期には，確定利付公社債よりも株式の需要が集中し，銀行も，引受けた株式を随時市場に放出して創業利得を収めることができた。そして，26年までベルギーの諸産業企業は，低為替を利して輸出を拡大しえたため，その業績を比較的良好であった。その後26年の金本位制への復帰は，1ポンド・スターリング＝175フラン（旧平価の1/7)と実勢とさして変らぬレートをもって行なわれた結果，ベルギーは深刻な安定恐慌を経験せずにすんだ。そして，それ以後は，還流して来た逃避資本や外資が，株式購入に向

第45表—I　会社の新設

1919……	541	1925……	695
1920……	614	1926……	535
1921……	486	1927……	751
1922……	483	1928……	999
1923……	560	1929……	1,064
1924……	778	1930……	751

Lemoine, *Les entreprise per actions*. p.24

第45表—II　部門別株式社債発行　1927—1929

	金額(1,000フラン)	総額中に占める比率
企業=参与会社	7,214,664	26.6%
植民地企業	3,789,400	14.0
銀行	3,567,587	13.2
電力	1,714,371	6.3
金属	1,445,637	5.3
化学	1,457,697	5.3

ibid, p.28

第46表　ベルギーにおける株式・社債発行（百万フラン）

* 社債を含む

**現物出資，銀行，企業会社の発行控除

	株式		社債(%)	総計	** 純額
	設立(%)	増資(%)			
1919	977 (45)	1,201*(55)	—	2,178	1,475
1920	829 (31)	1,394 (52)	429 (17)	2,653	2,183
1921	436 (26)	744 (45)	473 (29)	1,653	1,286
1922	414 (25)	897 (56)	310 (19)	1,621	1,302
1923	655 (32)	1,246 (62)	124 (6)	2,025	1,707
1924	577 (21)	2,173 (78)	40 (1)	2,790	2,303
1925	919 (38)	1,175 (49)	308 (13)	2,401	1,904
1926	1,125 (42)	1,513 (57)	18 (1)	2,656	2,320
1927	2,678 (42)	3,372 (53)	279 (5)	6,328	3,925
1928	6,312 (52)	5,939 (48)	12	12,263	6,333
1929	7,801 (51)	6,928 (47)	237 (2)	14,966	5,932
1930	2,424 (45)	2,055 (38)	877 (17)	5,356	2,898
計	24,148 (44)	28,636 (50)	3,107 (6)	56,891	31,248

Bulletin d' Information et Documentation de la Banque Nationale de Belgique, le.25 mars1931

第47表 ベルギー企業の外国における発行（百万フラン）

年次	総額*	オランダ	
		社債・優先株	普通株
1926	1,211	274	—
1927	397	354	156
1928	1,249	311	36
1929	119	95	211
1930	2,021	622	—
計	4,9971	16,561	413

* 社債計・優先株のみ（時価） Van der Valk, *t.a.p.* blz.108

第48表 地域別証券発行（1927年） 百万フラン

会社（事業所在地別）	設立	増資	社債	総計
国内のみ	1,218	1,449	93	2,760
国外及び国内・国外	505	1,634	134	2,274
コンゴ	955	287	50	1,293
計	2,678	3,371	278	6,327

L. Dupriez, *a.a.O.*S. 63.

けられ，資本市場を支えた（第46表）(3)，戦後の国際競争に耐え抜くためにベルギーの諸企業は，ルーマニア，ポーランド，オーストリア，チェッコ，フランス，ルクセンブルク，オランダ領東インド，コンゴなどで，石油，鉄鉱石，ゴム，亜鉛，鉛，銅などの原料資源を確保することを至上命令としたが，そのためには，外国に系列銀行や支店を持つソシエテ・ジェネラルなどの大銀行の協力を不可欠とした。特にコンゴは，戦後ベルギーの対外投資の最も重要な相手国となったが（第48表），その開発投資は，巨額かつ長期に及ぶため，ソシエテ・ジェネラルによる強力な支援—引受や発起活動—を必要とした。(4)，国際カルテルにおける発言力。輸出依存度の著しく高いベルギーの重化学工業資本にとって，保護関税による国内市場独占は無意味に近く，既に戦前からベルギーは自由貿易政策を採用していた。その主たる関心は，むしろ国際カルテルにおける生産又は輸出割当をどれだけ獲得しうるかにあったが，そのためには，大銀行による諸外国の独占体との調整が必要不可欠

第50表　ソシエテ・ジェネラル株式・社債保有分布（%）

部内	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930
銀行 国内	31.6	30.6	29.3	26.5	29.7	27.3	27.8	24.8	27.9	24.4	24.8
銀行 国外	6.2	6.3	6.2	6.6	5.4	5.1	4.6	3.9	2.4	3.1	3.3
鉄道・市電	9.8	10.2	10.0	9.9	7.4	8.5	7.2	7.8	5.6	8.4	7.7
石炭	12.7	12.4	13.6	14.8	13.8	13.3	9.4	8.4	7.3	7.2	7.0
金属	20.1	19.1	16.1	13.8	14.4	15.7	15.7	20.6	32.6	28.0	25.6
電気	2.4	2.1	2.0	2.0	2.7	2.6	3.5	3.6	3.0	5.3	5.8
ガラス	3.1	3.6	4.7	4.5	3.6	3.9	3.3	2.7	1.9	1.7	1.6
化学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.9	3.1
繊維	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.6	0.7
海運	—	—	—	—	—	—	3.4	4.8	0.8	2.8	2.6
参与会社	3.6	4.1	4.0	3.5	5.3	4.7	4.9	4.3	2.6	3.1	3.7
植民地	7.2	8.0	10.6	13.4	12.6	15.3	16.5	15.7	12.2	13.1	12.9
其の他	3.3	3.6	3.5	5.0	5.1	3.6	3.7	3.4	3.7	1.4	1.2
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

Van der Valk, *t.a.p.*blz. 72

第51表　ソシエテ・ジェネラルの支配率（%）

石炭業	25～30
鉄鋼業	48
亜鉛	60～75
銅	100
鉄道・市電	20
海運	40
電気	15
ガラス	40
化学	30
人絹	40
綿業	10
砂糖	90
タバコ	50
植民地企業	80～90

Van der Valk, *t..a.p.* blz.123

こうして，ソシエテ・ジェネラルは，ブロヴィダンスをも含め，ルクセンブルク，ロレーヌ，ベルギー，ザールを結ぶミネット地帯に一大「利益共同体」Interssengemeinschaft を形成し，国際カルテルにおける発言力を著しく強め，フランス資本とも緊密な提携関係を結ぶに至ったのである。又，非鉄金属部門でも，1921年，ユニオ

ン・ミニエールと共に「ホボーケン金属工業会社」Société Générale Métallurgiue de Hoboken（2,500万フラン）を，ユニオン・ミニエールと共に設立し，コンゴの粗銅，ニッケル，コバルト，ラディウム等の精錬を担当せしめた。（ソシエテ・ジェネラルの出資は1,250万フラン）[6]

植民地企業（26社）既に，大戦前から，コンゴの種々の企業の設立に参加していたが，1929年の「海外銀行」の吸収によって，更に大量の株式を取得し，植民地産業の80～90%を支配することになった。中でも，上カタンガ鉱業連合（ユニオン・ミニエール，Union Minière du Haut-Katanga）は，コンゴの銅，錫，コバルト，ウラン，金，鉄鉱等の鉱山及びこれに関連した電気，運輸を支配する国際的規模のトラストであり，[7] この他，ソシエテ・ジェネラルは，鉄道，電力，石炭，棉花，砂糖等の農園等のあらゆる分配している。[8]

化　学　この分野ではソルヴェーの勢力圧倒的で，ソシエテ・ジェネラルが進出する余地は小さかった。然し，ガラス工業では，既に戦前ヴァル・サン・ランベール Soc. des Cristalleries de Val-St.-Lambert と，マリーモン，Soc. des Vèrreries du Mariemont に参与しており，更に1921年，リビー・オウエンス式 Procédé Libbey-Owens による機械処理ガラス製作のため，ソルヴエー，コンツエルンと共同で，「国際機械処理ガラス製造会社」Compagnie Internationale pour la fabrication mécanique de verre を設立し，ドイツ，フランス，ベルギーの多数の同方式の企業に間接的に参与した。[9] 又，同じく1928—9年に，石炭化学の11の企業の大合同によって生れたトラスト，「合同化学」Union Chimique も，ソルヴエーと共同で支配している。[10] なお人絹工業への参与も，持株交換を通じて行っている。

銀　行　戦前からの16の系列銀行本店及び164の支店，代理店，220派出所 bureau met zitdagen を擁し，ベルギーの全店舗の¼に達している。そして，これらの

第52表　全国93行　主要貸借対照表項目（1930年12月31日，百万フラン）

銀行	払込資本金	%	払込資本金＋積立金	%	債務	%	株式社債保有	%	手形保有	%
ソシエテ・ジェネラル	1,305	26.27	2,712	31.00	10,942	32.92	2,306	32.00	2,100	24.95
ブリュッセル銀行	899	18.10	1,897	21.69	4,116	12.38	1.701	23.62	893	10.62
農民連盟	204	4.12	243	2.78	1,632	4.92	268	3.72	222	2.64
アントウェルペン信用銀行	150	3.02	226	2.58	806	2.42	253	3.52	226	2.68
其の他の諸銀行	2,409	48.49	3,668	41.95	15,742	47.36	2,676	37.14	4,973	59.11
計	4,967	100.00	8,746	100.00	33,238	100.00	7,204	100.00	8,414	100.00

Van der Valk, *t.a.p.* blz.59

第53表　ソシエテ・ジエネラル系列地方銀行　貸借対照表
1931年12月31日（百万フラン）

Banque	短期貸付	当座貸越	持株出資	社債	資本金	内部留保	預金
d′ Anvers	488	148	135	70	100	110	712
Centrale de la Dendre	195	179	8	67	6	22	402
Gén. du Luxembourg	103	167	7	4	25	11	253
Gén. Flandre-Occidentale	55	50	5	24	7	3	127
Centrale de la Sambre	112	163	5	23	10	23	270
de Courtrai	316	198	3	79	10	31	532
Centrale de la Meuse	20	55	2	2	3	5	77
de Flandre et de Gand	417	195	49	79	60	55	617
Centrale du Limbourg	68	59	6	12	10	3	139
Gén. du Centne	143	192	—	9	10	16	298
Gen. de Liège et Huy	228	455	69	—	50	53	605
Centrale de la Dyle	234	86	11	20	10	10	331
du Hainaut	169	169	11	50	10	22	367
Centrale de Namur	73	131	4	4	6	7	202
Centrale Tournaisiemne	173	89	8	13	4	15	263
de Verviers	127	150	7	—	9	8	271
計	2,921	2,486	330	456	330	394	5,466

aldaar, blz.72

ソシエテ・ジェネラル系の銀行頂金総額は，全国の⅓を占めていた。これら系列銀行は，それぞれ地域毎に顧客との繋りを有しているため，ソシエテ・ジェネラルも合併を避けて，その外見上の独立を維持していた。これらの諸行は，独自に，又は本社と協同でそれぞれ異った業務を営んでいるが，力点は通常の銀行業務に置かれている。但しアントウェルペン銀行は比較的株式保有の比率が高い。この他，戦前からの継続として Union Parisienne, Wiener Bankverein. Banque Générale du Nord, Crédit foncier d′ Extrême-Orient 等8行に3,130万フランを出資し，又二つの海外事業専門の銀行を支配している。一つは「ベルギー外国銀行」Banque belge pour l′ etranger で，戦前からの事業に加え，29年の「海外銀行」のソシエテ・ジェネラルへの合併に伴ってその海外事業も継承した。又，イタリア＝ベルギー銀行 Banque Italo-belge（資本金・積立金2億フラン）は，中欧，スペイン，エジプト，中国に支店を有し，1億7,700万フランを諸銀行に出資している。(12) このような内外の銀行への出資は，ソシエテ・ジェネラルの持株の1/3～1/4にも及び，親銀行に絶えず安定した収益を保証している。

石炭業　ソシエテ・ジェネラルは，戦後も14社に7,150万フランの出資を行なっているが，石炭業の収益は低下の一途にあるため，同社はカンピーヌ Campine

(Land van Kempen) の新炭田の開発に力を注ぐ一方，コークス化，石炭化学への利用に力を注いでいる。[13)14)]

なお，ソシエテ・ジェネラルは，電気，化学を中心に，次の参与会社 Beteiligungsgesellschaft を単独で支配している。

1 **Ufimar** (Société Union Financière et Maritime) 資本金2億フラン，積立金180万フラン，出資2億1,400万フラン。1928年に設立された海運関係の持株支配会社Agence maritime Internationale, Lloyd Royal, Mercantile Marine Engineering, Graving Dock Co. 等，ベルギー海運業の40%を支配している。

2 **Societe de Traction et d' Électricite**(資本金2.6億フラン) 1929年，Société d' électricité et de traction と Compaguie auxiliaire d' électricité et de transport の合併によって生れ，ソシエテ・ジェネラルは，Electrobel を除く電気・電鉄関係の持株をこの会社に移管した。31年現在，38の電気，市電会社を含む44社に2.68億フランを出資している。

3 **ユフィ** Ufi (Union fnancière et industrielle Liégeoise) ソシエテ・ジェネラルとその系列銀行 Banque Générale de Liège et Huy. がリエージュの個人銀行ナーゲルマーケル Nagelmacker の参加を得て1917年に資本金1,000万フランをもって設立し，29年迄に8,000万に増資した。うちソシエテ・ジェネラルは3,040万フランを出資している。主としてリエージュ地方の諸企業 Soc. Générale des Minérais, Fabrique Nationale d' Armes de Guerre 及び「ホボーケン金属工業」に参与。（10.1億）

4 **タバコフィナ** Tabacofina (Union financière belge des tabacs) 28年，アントウェルペン銀行によって設立された。主要な紙巻，葉巻タバコ会社とボール箱，印刷等の関連企業と主要都市の販売店を支配し，そのシェアは，ベルギーのタバコ工業の5割に及ぶといわれる。

5 **Cie. du Congo pour le Commerce et de l' Industrie** ソシエテ・ジェネラルの在コンゴ企業への持分の一部を移した引受会社。本社と協力してその統轄に当る。1930—31年には，銀行＝保険会社3，運輸9，商事10，農業10，工業15，其の他13の諸会社の株式を保有している。

6 **マリーモン・ガラス会社**，21年に，リビー・オウエンス法による機械処理ガラスの製造企業 Cie. Internationale pour la fabrication mécanique de Verre を Mutuelle Solvay と共同で設立した上，1930年にフルコー Fourcault 法によるガラスの製造企業13が合併して出来た Union des Verreries mécaniques Belges(31年末800万フランから2,800万へ増資，ソシエテ・ジェネラルが1000万を出資）の持株会社となった。この他，ベルギー，ドイツ，フランス等のリビー・オウエンス法のガラス会社の持株を加えて，合計4,400万フランの株式を保有し，むしろ，製造企業よ

り持株会社化している。

(2) **ブリュッセル銀行**　大戦直前の1914年の倍額増資に当って(15)，ベルギー，ロシア，フランス，ロシアに跨る大石炭企業主コペー Evence Coppée et Cie. が，1,500万フランを石炭会社株で現物出資して以来，コペー財閥との緊密な提携の下に，急速にその勢力を拡大し，ソシエテ・ジェネラルに迫

第54表　ブリュッセル銀行　貸借対照表（百万フラン）

	1913	1920	1923	1926	1928	1929	1930	1931
借方								
現金	4	88	101	214	217	230	320	314
手形	22	48	67	152	401	489	432	617
公債	1	152	102	72	158	86	155	175
短期証券	0.1	0.4	2	9	14	11	6	13
銀行預金	20	39	97	146	406	348	296	111
当座貸越	6	118	171	209	426	436	506	1,075
担保貸付	23	97	187	268	536	507	494	1,209
ルポール								
株式・社債	17	62	162	259	555	986	950	1,092
出資	11	30	29	29	94	153	185	172
株主貸付	—	1	1	1	33	326	48	—
不動産	1	11	20	20	20	20	40	125
貸方								
資本金	30	103	150	200	440	660	660	600
積立金	15	38	53	94	453	816	819	500
当座借越	55	484	758	1,030	1,872	2,029	1,855	3,237
其の他	0.1	13	22	30	30	18	14	57

Van der Valk, *t.a.p.* blz.77

る第二の銀行＝コンツェルンと化した。まず17年にブリュッセル国際銀行 Banque Internationale de Bruxelles を吸収して，その諸企業に対する出資を継承し，28年にはリェージュ信用銀行 Crédit Général Liégeois との合併によってリェージュ工業地帯の諸企業への参与は一挙に強化され，又ソルヴェー財閥とも資本，金融上の連繋を結んだ。そして銀行業においても，19の銀行を支配しその店舗数は，ソシエテ・ジェネラルに劣らない。

このようにブリュッセル銀行はソシエテ・ジェネラルに比して遙かに急テンポで支配を拡大したため，その持株にはかなりの不均衡がみられる。（第

第55表 ブリュッセル銀行 株式・社債保有分布（%）

部門	1919	1921	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930
銀行 国内	9.6	30.3	17.4	21.5	18.0	18.3	27.2	19.5	14.3	15.3
銀行 国外	1.8	11.1	12.0	8.5	7.2	7.1	6.4	3.5	2.6	6.0
鉄道・市電	10.6	4.1	5.6	3.7	3.0	1.5	1.5	1.9	—	—
石炭	26.9	18.8	17.3	14.1	14.1	13.7	15.1	—	—	—
金属	15.1	6.3	12.2	20.8	20.6	18.3	14.6	—	—	—
電気	18.0	13.8	15.0	10.8	11.2	11.5	10.6	6.5	24.2	21.2
ガラス	—	—	—	—	2.3	1.3	0.2	—	0.8	0.4
化学	11.1	5.8	3.5	2.4	1.9	1.0	2.7	—	0.7	2.0
海運	0.9	2.9	1.3	0.5	0.2	—	—	—	—	—
参与会社	—	—	—	0.4	0.4	2.7	1.2	43.0	49.3	50.5
植民地	1.5	3.4	4.0	3.6	9.8	12.8	10.4	17.4	7.5	4.2
其の他	4.5	3.5	11.7	13.7	10.4	11.8	10.1	8.2	0.6	0.5
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

Van der Valk. *t.a.p.* blz.78

54表，第55表），ブリュッセル銀行は，もともと Sofina 等の電気事業に深い関心を寄せており，29年迄，この分野を中心に持株支配を進めていたが，石炭業についても，コペー財閥との連繋からその持株支配が拡大し，31年には直接，間接支配下の炭坑の年産 580 万トンは，ソシエテ・ジェネル系（ただし直系のみ）の 550 万トンを凌いでいる。更に，コペー＝ブリュッセル銀行は，コークスの販路として製鉄企業に着目し，1920年には，エスペランス製鉄会社の支配権を握り，更に同様にティ・ル・シャトー＝マルジネル製鉄をもその掌中に収めた。

ブリュッセル銀行は，28年その持株の58%を参与会社 C.B.I.(Cie. belge pour l′ industrie, Sofina 及び Mutuelle Solvay も資本参加，資本金，積立金7.35億）とコンゴ信用銀行 Crégéco (Crédit Général du Congo) に移管した。前者は，製鉄 (Espérence-Longdoz, Arbed, Schneider) 石炭会社9，亜鉛鉱業1，ガラス2，建築1，石油1 (Finapetrol)，繊維2，化学1 (Union Chimique) の 7.07 億フランの株式を保有している。Crégéco は20年に設立され，29年持株支配会社になるに際し，その子会社の経営と銀行業務をアフリカ銀行 Banque d′ Afrique に移した。コンゴの工鉱業，農園

がソシエテ・ジェネラルの支配下にあるため，同社は，金融，商業方面に2.3億フランの出資を行なっている他，モロッコに種々の鉱山，農園を経営する<Financo>（資本金9,100万）を支配している。

(3) **ソルヴェー系**　両大戦間における資本集中の嵐の下で，多数の産業コンツェルンがソシエテ・ジェネラルやブリュッセル銀行の支配下に組込まれたのに対し，ひとりソーダ化学工業のソルヴェー・コンツェルンのみはその閉鎖的同族企業所有＝経営の実質を変えぬ儘，独立を堅持し，自らも，その金融機関ソルヴェー合名会社 Mutuelle Solvay (1914年 Mutelle Mobiliaire et Immobiliaire 27年改名）を通じて銀行業に進出した。同社は，系列企業の設立や拡張の便宜を計るべく，内外の大銀行と提携し，又，幾つかの外国銀行（殊に中欧）に参与した。ソルヴェー合名会社は，主としてダイヤモンドの取引に金融を行なって来た Banque Générale Belge（アントウェルペン）に参与していたが，28年，両者に他の銀行が加わって <Finabel>（Cie. financière et industrielle de Belgique)と云う持株支配＝企業会社が設立された。然し29年恐慌でダイヤ取引が危機に瀕し，Finabel もその保有株式の暴落が苦境に立ったため，Banque Générale belge と Finabel は合併し，Société Belge de Banque が生れた。この他，28年，ソルヴェー合名会社はリエージュ地区をの持株会社として Mutuelle Liégeoise を設立し，3,500万フランを出資しており，又，パリには，Mutuelle Industrielle を，ニューヨークにも Solvay American Investment Co. を設立している。[16]

(4) **農民同盟 Boerevbond 系**　フラマン系農民が農業恐慌に対処するため1890年に結成した農業協同組合「農民同盟」，その中央金融機関として，「中央信用金庫」Midden-Krediet-Kas を設けた。戦後の農村の繁栄によって，「中央信用金庫」は，全国1,070組合加盟の下に，1930年末には14.8億の預金を擁してブリュッセル銀行に次ぐ金融機関にのし上り，農業に関連した諸産業（飼料，食品＝罐詰，肥料，電気）に参与し，又，28年から，「全国銀行連合」Algemeene Bankvereeniging をその支配下に置いた。1893年，「農民同盟」の創立者ヘレピュッテ Georg Hellequtte は，同じくフラマン系の中小企

業金融の目的で「レーヴェン(ルーヴァン)国民銀行」Volksbank van Leuvenを設立したが,「農民同盟」とは人的交流があったのみで,資本的な繋りはなかった。戦後19年に株式銀行となり3,000万に増資した同行はフラマン地域を中心に幾つかの系列銀行を獲得し,21年には,アントウェルペン進出のため,同行及び系列銀行が農民同盟の参加を得て,同地に「全国銀行連合」を設立した。然るに26年の金本位制復帰に伴なって国庫証券 Bons du Trésorの新規発行が停止され，その資金の新しい運用の途を講じねばならなくなった中央信用金庫は，国民銀行を通じて新たな投資を進めんと計り，28年に同行の株式の一部を取得し，続いて,「全国銀行連合」との合同で，新しい「全国銀行連合」が生れた。同行は，東フランドル銀行 Bank van Oost-Vlaanderen（ガン，30年に吸収），商工銀行 Bank voor Handel en Nijverheid（クールトレー），をはじめ5つの系列行を合せて，合計2,500の代理店を擁し，又，従来関係の薄かったワロン地方でも Banque Provinciale（モンス）をその系列下に置いた。そして，31年，混合銀行 Crédit Général de Belgique の株式の1/3を取得して,これを併合し，二大銀行に次ぐ投資銀行としての地位を得，又，持株支配会社として，全国工業信用会社 Algemeene Maatschappij voor Nijverheidskrediet を設立した。[17] 然し，Crédit Général の資産内容は予想以上に悪く，結局後に「全国銀行連合」と「中央信用金庫」の命取りとなったのである。

(5) **ベルギー労働銀行** Belgische Bank van Arbeid. ガンを中心とした労働者生活協同組合「前進」De Vooruit（1880年，指導者アンゼーレ Eduard Anseele）が，1913年に，その貯蓄組合を統合して資本金100万フランで設立したものであるが,その業務も一般の株式銀行と殆んど変らない。戦後，次第に持株を増加させて，混合銀行と化したが,その参与は,繊維工業—発祥地との関係から—を主とし，化学，植民地企業がこれに次ぐ。製鉄・石炭殆んど関与していないのは，この銀行の手持資金量がこれらの巨大企業の要求に応ずることが出来ぬためである。この銀行の発展を支えたのは低為替によるベルギー繊維輸出の増大であり，28～9年にかけて，同行は，人造

繊維工業企業の設立に乗出し，Sidac (Société Industrielle des Applications de la Cellullose), Interchimic (S.A. Compagnie Internationale des Industries chimiques), Sarga (S.A. Soie Artificielle de Gand) に出資した。なお，「前進」は，24年にその出資を組合員に配分し，株式は取引所に上場され，形式上，労働者生活協同組合との繋りは切れることになった。然し，1億4,000万フランにのぼる預金の大部分は，労働者の貯蓄で，そのかなりの割合が，交互計算用や有価証券に固定されていたにも拘らず，大量失業の生れた30年以後にすら預金の大量引出には見舞われなかった。このことは，この銀行が，労働者の間で依然信用を保持していたことを示している。然し，大恐慌，繊維企業の収益の低下に伴い，後述する如く，この銀行も34年の不況で「全国銀行連合」と同じ運命をなめねばならなったのである。[18)]

(6) **産業金融公庫** Société Nationale de Crédit á l′ industrie.戦前，国立銀行の再割引を後楯として割引金庫が行なって来た中小企業金融を肩代りするため，1918年国立銀行の2,500万フラン全額出資によって設立され，戦災復興金融，輸出金融に重点を置いた。26年，主要民間銀行の出資で資本金を5,000万に引上げ，国立銀行から独立した。そして5年以上の長期債の発行によって資金を調達している。然し実際の貸出は，国立銀行以下の諸銀行を窓口とし，その保証の下に行なわれるので，大銀行がこの資金を利用しつつ大企業への支配を強化することを援ける結果となっている。貸出の60%以上は，金属，化学，石炭等，最も集中の進んだ分野に向けられ，大企業が，むしろその恩恵に浴していることがわかる。[19)]

この他，戦前からの大銀行 Crédit Anversois も29年に混合銀行に転じ，持株会社 Trust belgo-luxembourgeois de Valeurs Mobiliairs. を設立した。一方，電鉄王アンパン財閥も，Banque Industrielle Belge を1919年に設立し，（資本金，積立金7,700万，参与6,000万），<Electrobel><Electrorail> の持株をここに集中し，更に，Compagnie belge pour le chimique と云う持株会社（1919年）を通じて，Produits chimique de

Droogenbosch, Verreries de Pays de Liège et de la Campine Etablissements Bergougnan. に参与し,後に,Union Chimique に参加した。一方，個人銀行の地位は決定的に低落し，生残ったナーゲルマーケル Nagelmacker fils et Cie., アラール Josse Allard, ランベール, H. Lambert フィリップソン F.M. Phillipson, カッセル Cassel et Cie. もその役割は微々たるものとなった。[20)]

なお，電気事業の分野には，特定銀行の支配下にない，企業＝持株支配会社が存在するが，これは，この事業が巨額の投資を要し，しかもその資本の懐妊期間が著しく長期にわたるため，幾つかのグループの協力を必要とされるためである。[21)]

A **ソフィナ Sofina**. 戦後，後進国に積極的に進出することによって，世界的な企業となった。即ち，20年，ドイツ海外電気会社 Deutsche überseeische Elektrizitätgesellschaft の改組に伴って，南米に多数の電気事業を経営する Chade (Compagnia Hispgnia-Americana de Electricidad) の株式の一部を取得し，23年にはメキシコに Sidro (Soc. Internationale d′ énergie hydro-électrique レーヴェンシュタイン Löwenstein と共同）,スイスに，Bank für Elektrische Unternehmung in Zürich を，トルコに <Transeigar> を設立して，それぞれの国での事業を統轄する持株支配会社とした。28年，設立当初からの持分を株式に統合するため，解散し，新会社 Trust financier de Transport et d′ Entreprises industrielles に改組され，その際アメリカ（G.E.）を含む12カ国から出資を集めた。この他，同社はドイツにおける多数の電気事業を支配している他，イギリス，フランス，カナダにも参与の手を伸ばしている。設立当初からの出資者，ブリュッセル銀行は，コルク・トラスト C.I.L (Cie. Industrielle du Liège) の破産(1930年) の傷手から,ソフィナの持株の一部を手放したといわれているが，同行の支配力についての詳細は不明である。

B **Electrobel** (Cie. Gén. d′ Entreprises électrique et industrielle) 1920年，ソシエテ・ジェネラル，ブリュッセル銀行，ソルヴェー,ソフィナ,パリ＝オランダ銀行が協同して設立，3つの直営企業(Gas belge, Economique, Société Générale belge d′ entrprise économique)，3つの持株支配会社，(Electrofina, Electro-Trust, Unifet)を支配し，24の会社に技術，経営，金融を通じて影響力を行使している。そして，合計90の会社の株式を保有する。その事業は，ルーマニア，チエッコ，リトワニア，ライトヴィア，ポルトガル，蘭領東インドにわたっていた。

C **Sinerta** (Soc. Industrielle d′ Énergie et Transport) 1929年，「農民同盟」

＝「全国銀行連合」，（3,400万）Métalmin（ウーグレ系，4,400万）Engetra（ソフィナ系，3,400万）等によって設立された資本金2.25億の持株会社で，ベルギー最大の電力会社 Union Générale Belge d′ Électricité 及び Linalux （発電会社）を支配している。

D　ベルギー鉄道企業会社　Cie. Belge de Chemin de fer et d′ Entreprise. Cie. belge de chemin de fer secondaire の後身。ブラジルをはじめヨーロッパ内外の鉄道を経営していたが，戦後建設業に進出した。そして，11の鉄道，26の電気＝電鉄，12の建設会社を支配した。

さて，こうした巨大銀行と，産業独占との関係を，ドイツの場合と比較しながら検討して見よう。ドイツの大銀行も，産業革命期には，株式会社の発起＝発行業務を行う中で，多数の鉱工業企業に直接参与していたが，57年及び73年恐慌を転機として，発起業務に対して著しく慎重になり，むしろ，正規の銀行業務—殊に交互計算信用供与—と，監査役派遣をもって，産業独占体と結合するに至り，発行業務は交互計算信用を回収するための一手段の地位に顚落した。しかも，戦後のインフレの過程で，こうした交互計算信用を挺子とした大銀行の支配は大きく後退し，25年の安定恐慌後ですら，大産業独占体は，自己金融を推進めつあった。[22]

これに対して，ベルギーでは，大戦後に株式の引受＝発行，交互計算信用供与を通じて，再び大銀行が大産業独占体と結合して行なった。しかも，大銀行は，単に配当の取得や創業利得の獲得を目的として，引受＝発行に携ったわけではなく，持株支配を強力に推進めて，銀行自身が，持株支配会社に転化していった。そして，殊に議決特権株の活用によって，その出資比率に較べて数倍の投票権を行使し，しかも，その持株支配会社を通じて，更に同様の方式によって，多数の企業の支配権を握っている。[23]こうした銀行を頂点とするコンツェルンにおいて銀行は，その系列企業に対して，重役を派遣し，又，交互計算勘定によって，遊休資金を吸収したり，当座貸越を認めたりして，その経営を監督するに止らず，その持株を次第に特定の分野に集中し，技術的統一を計った。このため，銀行の重役の中に多数の技術者が見出され，彼等は，傘下企業に強力な技術的指導を行なった。[24]

こうした銀行の持株支配会社＝コンツェルン化は，本来の銀行の機能と早

晩衝突せざるを得ない。29年恐慌以降，その保有していた株式の暴落によって，これらの銀行は，大きな損害を蒙ったが，戦後急速に成長して来た。「全国銀行連合」は，Crédit Général との合併で経営は悪化し，「農民同盟」ともども，34年の不況で破産し，預金者に多大の損害を与えた。又，ベルギー労働銀行もその系列下の繊維工業企業の危機に捲込まれて，同じく34年破産に至った。そのため，政府は，8月22日の政令をもって，銀行改革に乗出し，持株支配会社と預金銀行を分離せしめ，後者に対して，持株を禁じ，引受発行も，6ケ月以内に市場に放出することを義務づけた。ソシエテ・ジェネラルは，その結果，「ソシエテ・ジェネラル銀行」 Banque de la Société Générale なる新銀行を切離し，系列下の地方銀行をこれに合体させ，同時に大恐慌以来の損失を償却すべく，2.39億の減資を実行した。その結果，ソシエテ・ジェネラルの持株は50%を下廻った。そして翌35年，子会社のベルギー外国銀行も，ソシエテ・ジェネラル銀行に吸収された，一方，ブリュッセル銀行は，既に31年系列銀行を吸収していたが，34年の分離に際して持株会社は，「ブリュフィナ」 Société de Bruxelles pour la Finance et l' industrie と改名され，この間，2.98億フランに上る償却を行なっている。[25] そして，ブリュフィナは，37年に，ウーグレ＝マリエ製鉄と利益共同体を形成するに至った。ウーグレ製鉄は，34年，ギリシヤ政府の支払拒否によって危機に陥ったが，社長ローノワ男 Baron de Launoit の手で実施された倍額増資によって，その危機を脱し，36～7年には小康を得た。そして，ウーグレ・グループは，持株会社コフィナンデュス Cofinindus (Compagnie financière et industrielle) を分離し，製鉄のみならず，石炭，化学にも参与をひろげつつあった。ブリュフィナとの接近は，ソシエテ・ジェネラルへの対抗のためと思われるが，これによって，このグループは，ベルギー最大の製鉄企業を擁し，ソシエテ・ジェネラルに対抗する勢力となった。後，37年末には，ローノワが，ブリュフィナの社長に就任し，事実上両者は統合された。[26]

このような，銀行業務の分離によって，大コンツェルンによる，発起＝発

行業務は，大きく制限され，両戦間の大銀行を頂点とするコンツェルン形成の動きは，事実上終止符を打たれることになったのである。[27)]

1) H.M.H.A. van der Valk, *De betrekkingen tusschen banken en industrie in België*. Haarlem 1932. blz. 157—166. R.J. Lemoine, 'La concentration des entreprises en Belgique.' *Revue Economiqve Internationale* Juin. 1929 pp. 1～29. L. Dupriez, 'Belgien und die internationalen Kapitalbewegungen 1917—1927' *Schriften des Vereins für die Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* Bd. 174—Ⅲ (1928). SS. 49—66. R.J. Lemoine, 'Le développement économiqne des colonies et l′ intégration de la production.' *Moniteur des Intérêts Matériels le* 13,15, 20, 26. novembre 1925. B.S. Chlepner, 'La concentration bancaire en Belgique.' *Revue d′ Economie Politique* XLⅢ (1929) pp.1082—1098. 戦後の発行状況は，第45～47表を参照。外国における発行

第56表　主要金属工業企業

有価証券保有高（1930年12月31日，百万フラン）

企業名	有価証券保有	其の他の資産	資本金・積立金	社債
Angleur-Athus	117	810	486	167
Arbed	730	2,516	1,967	1,055
Cockerill	96	1,396	665	203
Espérence-Longdoz	58	291	254	5
Ougrée-Marihaye	380	1,830	1,240	434
Vieille Montagne	70	740	368	213

Van der Valk, *i.a.p.* blz.121

第57表　ベルギーにおける資本の集積・集中

資本金	企業数（%）		資本金*（%）	
	1927	1930	1927	1930
100万フラン未満	2,813(56)	3,502(53)	1,243(6)	1,590(4)
100以上～ 500万未満	1,536(30)	2,034(30)	3,861(18)	5,156(12)
500以上～1,000万未満	325(7)	479(7)	2,432(11)	3,561(8)
1,000以上～2,000万未満	171(3)	288(4)	2,522(12)	4,257(10)
2,000万以上	188(4)	365(6)	11,511(53)	29,211(67)
計	5,063(100)	6,668(100)	21,601(100)	43,785(100)

＊ 100万フラン

Lemoine, 'Les enreprise' p.42, do., 'La concentration' p.7

は，オランダ，ニュー・ヨーク，スイス，ロンドンで僅かながら行なわれているが，中でも，オランダの比重が高い。外国での発行は，優先株，社債に集中している点に注意。

2) この時期における生産の集積，資本集積・集中について，詳しい資料は入手できない上，企業規模自身，コンツェルン形成，持株支配を正確に表示してはいない。それにも拘らず，1927年と30年の資本金による比較から，資本金2,000万フラン以上の大企業の比重が，金本位制復帰から，大恐慌までの間に著しく増大していることがわかる。(第57表)なお，戦後，大企業，殊に製鉄企業は，スペインやフランスの鉄鉱会社，内外の石炭会社，あるいは，加工部門の諸企業（ブリキ，鋼管），更に電力，セメント，化学に参与の手を伸ばしているが，これは，原料確保と，副産物の利用を目的としている。（第56表によって，各会社の資産を占める有価証券の割合を参照。殊にウーグレ＝マリエの場合を見よ）

3) Chlepenr, *Marché finacier*. chap. V. *Le centenaire de le Société Générale* 1822—1922, Chap. 4を参照。

4) 以下のソシエテ・ジェネラルの参与については，Van der Valk, *t.a.p.* blz.68-76, 126—129. R. Liefmann, *Beteiligungs-und Finanzierungsgesellschaften. Eine Studie über den Effektenkapitalismus*. 5. neubearbeitete Auflage, Jena 1931. SS. 164～165. *Le Centenaire* pp.207, 223による。

5) 同社は，旧ドイツ＝ルクセンブルク製鉄株式会社 Deutsch-Luxemburgische Bergwerk-u. Hütten-A.G. 及び，リューメリンゲン＝サンクト・イングベルト製鉄 Rümelinger u. St. Ingbertを経承したもので，Rümelingen, Differdingen（ルクセンブルク）Ottange（旧ドイツ領ロードリンゲン）St. Ingbert（ザール）に合計16の製鉄所（1913年現在で銑鉄59.4万トン，鋼鉄51.5万トン）を有した。ソシエテ・ジェネラルは，30年末で，1,500万フランの出資をしている。フランス側の出資者は，マリーヌ・オメクール La Marine et Homécourt，ポン・タ・ミュッソン Pont-à-Musson 等の大製鉄資本。

一方，A.R.B.E.D.は，1911年，ザール＝ルクセンブルクの4つの企業（Hochofen und Hüttenwerke Düdelingen, Hüttenwerk Eich, Le Gallais-Metz & Cie, Hüttenwerk Saarbücken 等，ドイツ＝ルクセンブルク＝ベルギー系企業の合同によつて生れた鉄鋼トラストで，26年「テル・ルージュ製鉄」（19年，「ゲルゼンキルヘン」のライン左岸の資産—Eschweiler-Bergwerksverein, Esch a.d. Alzette, Belval の三製鉄所，ルクセンブルク内の鉄鉱区 Rote Erde を基に発足したフランス＝ベルギー＝ルクセンブルク系企業）と合同した結果，合同製鋼に次ぐヨーロッパ第二の製鉄企業となった。

同社には，さきの Terre Rouge との合併を通じて，シューネドル Schneider，ポン・タ・ミュッソンなどのフランス製鉄資本が約10%程参与している。同社は，Burbach-Hostenbach（ザール）Düdelingen, Esch-Dommeldingen, Esch a/d

Alzette, Belval. 等に製鉄所を有する上に，フランス(ロレーヌ)のオーヴリーヴ＝ヴィレリュ S. Métallurgique d′ Aubrives-Villerupt. ドイツの「エッシュヴァイラー鉱業連合」Eschweiler-Bergwerks-Verein,「フェルテン＝ギョーム・カルルスヴェルク株式会社」Felten u. Guillaume Carlswerk A.G（ドイツ最大のケーブル製造企業）ベルギーの「フランドル釘・針金会社」S.A. Clouteriie et Tréfilerie des Flandres.(ガン，ブリュージュ)を所有する。Vgl.,Marcus, *a.a.*O. SS.1～9.Le Centenaire p.210. C. Wagner, *La sidérurgie luxembourgeoise sous le régime du Zollvrein et de l′ Union économique belgoluxenbourgeoise*. Luxmbourg 1950. 島田悦子「西欧の典型的な国際重工業コンツェルン ARBED」政経月誌54号)

猶，戦後のベルギー鉄鋼業の地位については，詳説する余裕がないが，戦後ドイツの後退に乗じて，ベルギー＝ルクセンブルク（21年より関税同盟）は，その粗鋼生産を，1912年の380万トンから，1929年の681万トンに増大させ，フランス，イギリスにほぼ匹敵する450万トン（戦前100～150万トン）を輸出した。但し，ベルギーでは，戦前の250万トンから400万トンに増加したに止り，ルクセンブルクの130万トンから280万トンへの増加に比して，そのテンポは劣る。）C. Reuss et al., *op.cit*. Annexe statistique. 及び Wagner. *op.cit*. p.143. 大橋周治「現代の産業，鉄鋼業，東洋経済新報社　昭和41年，101～102頁。

6) オーレン Oolen に1911年設けられたカタンガ銅の精錬工場に起源を有し，19年ホボーケンのドイツ金銀精錬会社 Deutsche Gold-u. Silberscheideanstalt の工場（敵国資産として没収）を継承し，増資を行なった。同社はコンゴ銅の半ばを精錬しうるのみならず，コバルト生産でも，28年には450トンに達し，カナダの生産高を僅かに下廻ったのみであった。同社の歴史については，*Societé Générale Métallurgique de Hoboken*. 1908—1958. Bruxelles 1958. を参照。この他，ソシエテ・ジェネラルは，その主導の下ホボーケシ金属工業及び，ヴィエイユー・モンターニュ鉛鉱業，幾つかの外国の鉱山会社の出資によって，1919年 Société-Générale des Minérais（1,000万後2,500万フラン）を設立している。

7) ＜Union Minière＞については，Marcus, *a.a.O* SS.120—130. 同社は世界の銅生産の8％を支配している。

8) 26社（12億9,800万フラン出資），ユニオン・ミニエール（2.31億）の他，Soc. Minière du Bécéka (6,800万), Charbonnage de la Luena(800万), Cie. du chemin de fer du Bas-Congo au Haut Katanga(450万), Société des chemin de fer Léopoldville-Katavga-Diols（1,500万），Cie. sucrière congolaise（500万），Comité Nationale de Kivu（500万），Cie. du Congo pour le commerce et l′ Industrie(1,050万),Société de Mutualité Coloniale (190万) Soc. Internationale Forestière et Minière du Congo. Cie. cotonnière, Cie.

Africaine de Navigation (Liefmann, *a.a.O.* SS.164—5. *Le Centenaire*, p.218)

9) Banudhuin, *Histoire économique de la Belgique*. p.93.

10) 合同化学に参加したのは，Société Générale belge de Produits Chimique で，<Produits Chimiques d′ Aisau><Produits Chimiques de Moustier-Sambre>の合同によって生れ，その際，ソシエテ・ジェネラルが資本参加を行なった。20年には，l′ Union des Produits Chimiques d′ Hemixem>を吸収した。Baudhuin, *op.cit.* pp.87—8.

11) Banque d′ Anvers が，Banque de l′ Union Anversoise を，Banque de Conrtrai は，Banque de Roulers-Thielt. を Banque Centrale Tournaisienne が，Banque d′ escompte de Tournai を合併し，Arlon に Banque Générale du Luxembourg が新設された。この他21年に，Banque Générale de Liège と Banque de Huy が合併し，Banque Gén. de Liège et de Huy となった。

12) この他，1919 年，Union Parisienne の後援で，Banque Générale du Nord. (資本金1億フラン) が設立された。この他，外国の系列行としては，Allgemeine Böhmische Bankverein (チェッコ) Bank voor Indië (Rotterdamsche Bank-veeeniging の主導) *Le Centenaire*, p.223.

13) Hornu et Wasmes は Grand Buisson を Produits au Flénu が Nord du Coeur を合併した。支配下の石炭会社は，14社(7,140万フラン出資，1930年現在) Monceou-Fontaines, Levant du Flénu, Charbonnages Réunis de Charleroi, André-Dumont, Beeringen, Houthaelen, Laura-en-Vereeniging 等。

14) ソシエテ・ジェネラルの繊維工業への出資は，殆んど見られないが，それでも，1917年，8つの紡績会社，6つの織布会社と<Union Cotonnière>(資本金2,500万，26.5万錘，織機1,354千台) に300万を出資している。

又，石油では，1920年の「ペトロフィナ」Cie. Financière Belge des Petroles に，他の銀行や石油会社と共に参加している。これは，ロシアを失ったベルギーに，これに代えてドイツの撤退後のルーマニア油田を獲得せんとするのであった。Liefmann, *a.a.O.* S.549.

15) Van der Valk, *t.a.p.* blz. 76—81, 129—131, Baudhuin, *op. cit.* p. 136. 1928年，個人銀行家 Alfred Löwenstein が，ブリュッセル銀行株の買占め，乗取りを企てたが防戦した重役会の勝利に終った。

猶，ベルギー銀行の保有株式の74%，9.74億フランは議決特権株である。

16) Van der Valk, *t.a.p.* blz.85～87. Baudhuin, *op.cit.* pp. 142—5. ソルヴェー財閥は，本社(ソルヴェー合資会社 Société en commandite simple Solvay et Cie. 資本金3.3億)の下に統轄されている。ソルヴェー・グループは，ガラス工業では，先に述べたように，ソシエテ・ジェネラルと提携して，リビー・オウエンス

式機械処理製造に乗出し，1931年，リビー・オウエンスが，そのベルギーの工場をSociété Glaces et Verresに統合するに及んで，ソルヴェーは，同社の大株主となった。Vgl,, 'Strukturäderungen in der belgischen Glasindustrie' *Frankurfer Zeitung* 13Aug. 1931. 又，同グループは，人絹工業では＜Fabelta＞（全企業が合同）の最重要株主である。又，合同化学は，ソルヴェー系の持株会社，Cie. Chimique et Industrielle de Belgiqueを吸収し，ソルヴェーの発言力は強化された。ソルヴェーの在外企業のうち，イギリスのものは，I.C.I. に，アメリカのものは，Allied Chemical(20%)に合同せしめ，それぞれの大株主となった。

17) F. Baudhuin, 'Le Boerenbond Belge. Une Puissance financière original *Revue Économique Internationale* jan. 1930. pp. 113—137. 農民同盟創立には，小農の維持を計ろうとするカトリック教会の支援があった。

18) F. Smets, 'Les Banqeus Socialistes en Belgique' *Revue Économique Internarionale*, mai 1931, pp.334—353.

19) L. Mahieu 'Une Grand Création belge d′ aprés-guerre. La Société Nationale de Crédit à l′ industrie' *Revue Économique Internationale*, Jan. 1922.

20) Van der Valk, *t.a.p.* blz,99, Bandhuin, *op.cit.* pp.145—147.

21) Van der Valk, *t.a.p.* blz.139—143. 幾つかの大産業企業も，参与会社を設立しているが（Ougrée-Marihaye-Soc. Commerciale de Belgique. 略称，*Socobelge*. Cockerill-Mutuelle Cockerill），補足的な役割しか演じていない。但しイタリア系の企業＝参与会社CIBE.（Cie Italo-belge pour Entreprise d′ Électricité et d′ Utilité publique，ヴェネチアのSocietà Adriatica di Elettricità により，1928年，500万フランで設立）のみは，急速に成長し，1929年初に3,000万フランに，同年8月1.5億は増資しており，大電気参与＝企業会社の列に加わった。

22) 大野英二「ドイツ資本主義論」第4章「銀行資本と産業資本」を参照。

23) 議決特権株の制度は，フランス，ドイツの場合と同様，インフレの時期に外国資本による企業支配を防ぐことを目的として認めれたが，実際には，通貨安定以後に大多数の企業，殊に大企業がこれを採用している。そして，大銀行とその持株支配会社は，出資比率の数倍の投票権を行使することが出来る。（C.I.L. では，支配

第58表　議決特権株発行会社

1920……2	1925……8
1921……6	1926……9
1922……3	1927……28
1923……5	1928……94
1924……7	1929……83

Lemsine, *Les entreprise par actions* p.42

第59表 議決特権株発行の企業比率

	総数		議決特権株発行企業	
	会社数	資本金	会社数（%）	資本金（%）
上場	885	88,000[1]	145(16)	43,560[1] (49)
非上場	4,834	15,000[2]	107(2)	3,834 (25)
計	5,719	103,000	252(4.4)	47,395 (46)

1) 1929年12月9日現在時価 2) 額面 Lamal, *op.cit.* p.47

第60表 議決特権株の支配力

会社	資本金(百万フラン)		議決特権株（C）	C/A（%）	議決権支配（%）
	時価(A)	額面(B)			
Sofina	4,400	200	100	2.3	50.0
Electrobel	1,740	192	35	2.0	50.7
Union Chimique	1,160	210	30	2.5	50.0

Lamal, *op.cit.* p.19

下にある企業の2.7%の出資により，投票権の88%が，ソフィナ，エレクトロベル，合同化学でも，資本金（取引所の相場）の2～2.5%の払込しか行なわぬ特権株に投票権の5.1%が握られている。cf. R.J. Lemoine, *Les entreprises par actions dans la Cadre d' évolution industrielle* (Document 69 de la Société d' Économie politique de la Belgique) Bruxelles. 1931. pp.42—44. E. Lamal, Une Enquête sur les actions à vote priviligié en Belgique.Bruxelles. 1930. pp. 19—20, 45—47. 及び，第58～60表参照のこと。

24) Van der Valk. *t.a.p.* blz.104.

25) Baudhuin, *op.cit.* pp.135, 137. 174—199, cf. *Reueil des lois et de Belgique arrêtés royaux* 122—4, Année. 1934. no. 402. (Arrêté royal relatif à la protection de l' epargne et l' activité bancaire. pp.1708—1713)

26) Baudhuin, op.cit. pp.138—9. ウーグレ社は，23年，液体空気会社 Soc. de l' Air Liquide と共同で，「ベルギー窒素」Soc. Belge de l' Azote を設立し，クロード Claude 法のアンモニア合成に乗り出し，この他，Bray, Fontaine-l' Evêque, アリアンス＝モンソー製鉄 Société Métallurgique d' Alliance-Monceau を合併した。

27) この法令発布以降の35～39年にかけては，恐慌のどん底，32～4年に比して発行

総額は劣っている。

猶，続く39年には—戦争勃発の不安な情勢の中で，Crédit Anversois. Caisse Générale de Rapports et Dépôts が倒産し，ベルギーは，今や両コンツェルンに二分されるに至った。aldar, blz, 125 vv.

VI　結　び

以上，概観して来た如く，ベルギーにおいては，既に産業革命の過程で，ソシエテ・ジェネラルやベルギー銀行の如き株式大発券銀行が，遊休資金を集中しつつ，株式会社の発起業務を遂行し，更に交互計算信用や直接参与によって，多数の製鉄，石炭企業を支配した。これは，何よりも，ベルギーにおいては，株式銀行の設立を妨げる強力な個人銀行の勢力を欠き，既に1822年に設立されたソシエテ・ジェネラルが広大な国有地をも資産として所有する強力な金融機関として登場して来ていたためであり，他方，1830年の独立以来，ベルギーは—ドイツと異り—ヨーロッパ大陸における経済的自由主義の模範たるに相応しく，株式会社の設立を抑圧す諸制約が殆んど加えられなかったことを負うている。こうした諸条件の中で，一定の展開をみせながら，イギリスの競争によって停滞していた。製鉄・機械,石炭業が,一挙に生産の集積,資本の集積・集中を推進めて,イギリスに劣らぬ生産力水準に到達することが出来た。然しながら,かかる短期間の急激な資本蓄積の歪みは,38年及び48年の恐慌に当って，これ等の二つの投資銀行の支払停止を惹起し，結局，51年，両行は発券機能を放棄して，これを国立銀行 Banque Nationale に集中せざるを得なくなった。このことから見ても，ベルギーにおいては，何故にイギリス型の発券銀行が設立されながら，機能転化を余儀なくされて，持株支配会社 Kontrollgesellschaft，企業会社 Finanzierungsgesellschaft，更に投資会社 Kapitalanlagegesellschaft の諸機能をも，一つの経営内に包摂するに至ったが明瞭となろう。

この後，鉄道建設の時代に入るや，ベルギー銀行は，クレディ・モビリェに追随して，破滅し，その発起せる諸企業—ウーグレ，エスペランス両製鉄，ヴィエイユ・モンターニュ鉛鉱業—等は，自立して行なった。これに対し，

ソシエテ・ジェネラルは，この時期には，鉄道会社の設立には参与しているとはいえ，全体としては，旧来からの石炭＝製鉄企業を引続き強力に支配し，鉄道への参与は，むしろ製鉄企業の市場確保のための手段に過ぎなかった。

こうして，ベルギーは，ソシエテ・ジェネラルなる，巨大な持株支配会社を遺産として抱えた儘，大不況に突入することとなったのである。然し，ドイツの場合と異り，第一次大戦迄の時期には，金融寡頭制は―それ以前から大銀行による産業支配の歴史を有するにも拘らず―強力なものとはなり得なかった。それは，ベルギーにおける基幹産業である製鉄業が，鋼鉄生産への転換に立ち遅れ，その狭隘な国内市場と相俟って，その生産の集積，資本の集積・集中では，ドイツ，フランスに比して著しく劣っていたこと，又，石炭産業も，生産諸条件の悪化により，もはや，国際競争において有力な地位を占めることが難しくなったためであった。このような，世界経済の構造転換の中で，ベルギー資本は，ロシアを中心に製鉄や電鉄＝電力事業で直接事業投資の形態で資本輸出を進めて行く一方，ベルギーはその低賃銀を武器として，イギリス等へ主として鋼半製品を輸出しつつ，国際分業の中にその地位を確保した。然も，ベルギーの在外企業は，国際的証券市場に成長したブリュッセルで，外国資本を吸収して，新規の設立や増資を自由に行なえるため，銀行資本の仲介を必要としなかった。とはいえこのようなベルギーの独占形成の過程で，幾つかの銀行資本を中心に金融資本の成立が認められる。例えば，ソシエテ・ジェネラルは，その支配下にある石炭企業の集中を推進め，全国カルテルの形成に指導的役割を演じ，又，製鉄業についても，その支配企業の集中度を主導し，ロシアへの進出においても，重要な役割を担っていた。然し，ソシエテ・ジェネラル系の製鉄企業は，全体として，業績が不振で，これ迄の錬鉄時代のベルギー製鉄業に占めて来た地位は失なっていた。一方，コンゴ植民地の開発には，ソシエテ・ジェネラルも重要な役割を演じたとはいえ，あのカタンガの銅，ウラン生産は軌道に乗っていなかった。そのため，ソシエテ・ジェネラルは，巨額の内部留保を持っているにもかかわらず産業企業への参与には，消極的であり，経営の力点は正規の金融業務

や公債発行の方に置かれるに至った。

このようなベルギー資本主義の構造は第一次大戦を境として大きな変容を遂げた。戦争による設備，破壊の老朽化や戦後の激しい国際競争の中で，ベルギーの重工業資本は，一挙に資本の集積，集中を推進することを強制された。然し，ブリュッセルの国際資本市場は既になく，ソシエテ・ジェネラルの如き大銀行が，引受＝発行業務を担当せねばならなくなったが，幸い戦後のインフレーション，農村の好況，26年の金本位体制復帰後の逃避資本の還流によって，発行は容易であった。そして，ソシエテ・ジェネラルと並んで，石炭資本コペー財閥の支配するブリュッセル銀行が，銀行集中を繰返えしつつ持株支配を拡大し，ソシエテ・ジェネラルに迫る大コンツェルンと化した。

一方，これ迄，最大の資本輸出先であったロシアにおける資産が革命によって失われ，ベルギーの資本輸出は，コンゴをはじめとする原料獲得の方へ転じたが，中でもカタンガの銅，ウランは，戦後急速にその生産を増し，ベルギーに巨額の超過利潤をもたらした。そして，ソシエテ・ジェネラルは，コンゴの植民地企業の90%近くを支配する一方，ドイツ関税同盟を離れたルクセンブルク＝ザールの巨大製鉄トラスト，ARBED や HADIR に強力な参与を行ない，ベルギーやミネット鉱地帯を結ぶ強力な <Interessengemeinschaft> を形成しつつ，シュネードル等のフランス資本と提携関係を結ぶに至った。こうして，ソシエテ・ジェネラルは，コンゴの銅等の非鉄金属の分野では，イギリス資本とも共同し，一方製鉄業で，フランスと結びつつ，国際カルテルに強い発言力を保持したのである。又，戦前はあまり関係しなかった電気トラストにも，強力に参与し，化学についても，ソルヴェー・コンツェルンと提携し，特にリビー・オウエンス式機械処理ガラスの製造で，ヨーロッパのガラス工業の中に強力なシェアを保持するに至った。

このように，ベルギーの巨大銀行自身，コンツェルンの株式支配機関と化したが，29年恐慌後，34年に銀行の経営を維持するため，逆に銀行部門を切離すに至った。そして，ブリュッセル銀行（ブリュフィナ）グループは，37

年，ウーグレ製鉄と，合同し，ソルヴェを除いた。ベルギーの産業企業の悉くが，ソシエテ・ジェネラルか，ブリュフィナ＝ウーグレ系の二つのコンツェルンに統合されるに至ったのである。

かくして，ベルギーでは，第一次大戦後，ドイツとは逆に，金融寡頭支配の確立が見らることになったのである。[1)]

1) 戦後，両グループの提携は，著しく進んだ。両者は A.R.B.E.D. H.A.DIR に，それぞれ強い参与を行なっていたが，1945年，コックリルが，アングレール＝アトゥース製鉄を吸収して，ソシエテ・ジェネラルが同社の20％の株式を握った。更に，55年ウーグレとコックリルが合併し，同社は66年プロヴィダンスを，68年，エスペランスを吸収し，68年，アルベッドとアディルも合同するに至った。